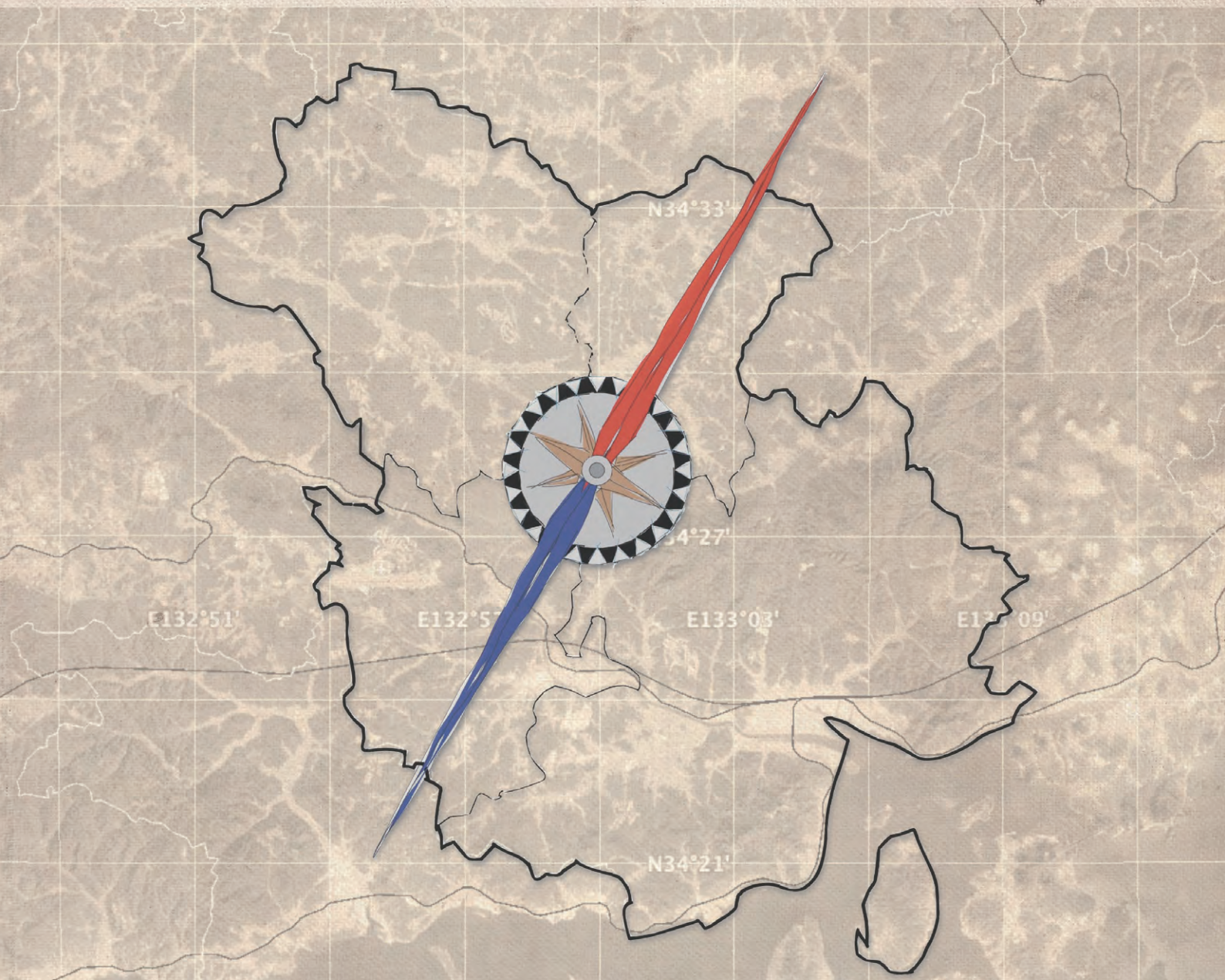
the 6th Brand New VISION



Direction Toward HAPPINESS

笑顔への道標

（一社）三原青年会議所

the 6th Brand New VISION

Direction Toward HAPPINESS

笑顔への道標

目次

第１章　はじめに……4
1.1 理事長挨拶 ……4
1.2 担当委員長挨拶 ……4
～三原JCとそのVISION～
1.3 三原JCとは？ ……5
1.4 これまでの私たちのVISIONとその取り組み……6
瀬戸のインターチェンジ“三原”－歴史と未来の調和した福祉都市へ－……6
インターフェイスみはら21C －瀬戸、ロマン、国際色豊かな都市“三原”－ ……6
New Gravity　みはら －ドラマチックな出会い!広域交流都市－ ……6
Vision2001 コラボレーションシティ21 ……7
VISION 三原の誇想（こそう） 創力（そうりょく） ……7
1.5 The 6th Brand new VISION ……7

課題　取組

第2章　これからの私たちの課題
2.1 全ての人々の平和･人権･幸せ ……8
2.2 日本の心 ……10
2.2-1 日本という国 ……10
2.2-2 日本人としての生き方 ……10
2.3 国家の課題 ……12
2.3-1 先進国として ……12
2.3-2 近現代史 ……12
2.3-3 憲法 ……12
2.3-4 選挙 ……12
2.4 災害支援･東日本大震災を経験して … 14
2.4-1 緊急時の対応 ……14
2.4-2 エネルギー問題 ……14
2.4-3 正しい情報の選択 ……14
2.5 社会情勢の変化 ……16
2.5-1 人口減少時代を迎えて ……16
2.5-2 高度成長の終焉 ……16
2.5-3 社会保障問題 ……18
2.5-4 核家族化 ……18

第3章　これからの私たちの取り組み（VISION）
3.1 各エリアJCへの参画及び近隣JCとの連携の強化 ……9
3.2 徳育を推進し、日本の心を紡ぐ ……11
3.2-1 徳育の推進 ……11
3.2-2 地域教育の実施 ……11
3.2-3 家庭教育の重要性 ……11
3.2-4 社会･文化から伝える日本の心 ……11
3.3 より良い国へ ……13
3.3-1 憲法を学び、憲法への意識を高める ……13
3.3-2 政治を学び、選挙への意識を高める ……13
3.3-3 領土領海問題を学び、国益への意識を高める ……13
3.4 災害への取り組み ……15
3.4-1 緊急時災害支援オペレーションの確立 ……15
3.4-2 エネルギー問題に対する意識向上 ……15
3.4-3 正しい情報の取捨選択を学び、正しい情報の発信を学ぶ… 15
3.5 現状を受け止め「これから」の時代へ ……17
3.5-1 縮小社会に向けた都市政策の提言、コンパクトシティの検討… 17
3.5-2 行政サービスの民営化への推進 ……17
三原の移り変わり ……19

課題　取組

2.6 わがまちの現状 …… 20
2.6-1 人口流出・過疎化 …… 20
2.6-2 定住から転住へ …… 20

2.7 まちの衰退 …… 22
2.7-1 まちの移り変わり …… 22
2.7-2 工業と商業 …… 22
2.7-3 地域の繋がりの希薄化 …… 22

2.8わがまち三原・とても恵まれたまち … 24
2.8-1 自然 …… 24
2.8-2 歴史 …… 24
2-8-3 環境 …… 24

2.9 三原やっさ祭り・踊り …… 26
2.9-1 やっさ祭りと三原 …… 26
2.9-2 やっさ祭りと三原JC …… 26
2.9-3 やっさ祭り運営の課題 …… 26
2.9-4 やっさ祭りの組織運営 …… 28

3.6 衰退を乗り越え発展する三原へ …… 21
3.6-1 好循環サイクルの構築 …… 21
3.6-2 大都市一極化から地域分散型社会へ …… 21
3.6-3 優良な企業の誘致 …… 21
3.6-4 都市開発　工業都市からバランスの良いまちへ …… 21
3.6-5 子育て環境整備 …… 21

3.7 魅力あるまちを創造する …… 23
3.7-1 新たな三原の魅力の醸造 …… 23
3.7-2 新たな地域コミュニティ創造の支援 …… 23

3.8 ハード面の提言 …… 25
3.8-1 駅前再開発を提案 …… 25
3.8-2 恵下谷バイパス・空港アクセス道路・三原バイパス …… 25

3.9 祭りでまちを盛り上げる …… 27
3.9-1 より多くの市民が楽しみ、関わる祭りへ …… 27
3.9-2 やっさ踊りの振興 …… 27
3.9-3 祭り成長戦略 …… 29

第４章　これからの私たち自身
4.1 社会・地域に必要とされる団体であり続ける …… 30
4.1-1　三原JCらしい活動 …… 30
4.1-2　OB会員とのネットワークをさらに活用 …… 30
4-1.3　行政・他団体との連携 …… 30
4.1-4　会員の拡大 …… 30
4.2 次の時代のJAYCEEたちへ …… 31
4.3 あとがき …… 31
参考文献・引用・参考資料 …… 32
ビジョン策定メンバー・組織図 …… 33

第１章　はじめに

1.1 理事長挨拶

一般社団法人 三原青年会議所
2014年度理事長　倉橋　英治

私たち一般社団法人 三原青年会議所は1962年設立以来「明るい豊かな社会の実現」を目指し、その時々の経済、社会、文化等に関する諸問題を調査研究し、市民、行政あるいは各種団体との連携を通じ、地域社会の正しい発展を図るべく活動して参りました。その間、時代に先駆けたまちづくりの方向性を打ち出すべく、1973年「瀬戸のインターチェンジ三原」～歴史と未来の調和した福祉都市～構想、1985年「インターフェイスみはら21Ｃ」～瀬戸、ロマン、国際色豊かな都市“三原”～構想、1992年「New Gravityみはら」～ドラマチックな出会い、広域交流都市～構想、2000年「コラボレーションシティ21」構想を発表して参りました。そして2005年。三原市においては広域合併の動きの中で4つの行政区が合併し、同年3月22日に新三原市が誕生したのを機に、「三原の誇想 創力」構想を5つ目のビジョンとして発表し、地域主権型社会の構築に向け取り組んで参りました。

昨年、私たちは市民意識向上を目的とし、市長選挙における公開討論会を開催いたしました。民意が反映され新しい市政が開かれたこのまちは、今、変わろうとしています。しかしながら、まちの変革は待っていれば訪れるものではありません。自らが求め、変わるのではなく、変えるという気概でまちの誇りを伝承し続ける必要があると考えます。新市誕生より間もなく10年を迎える節目と、行政においても新たな三原市基本構想策定に着手されるこのタイミングにおいて、責任世代とも言われる私たち青年の視点でこのまちの将来像をさらに具体的に求めるべく、本年、6つ目の新たなビジョン「Direction Toward HAPPINESS―笑顔への道標―」を発表いたします。

本ビジョンは、これまでの社会開発構想に加えて、私たち自身のあるべき姿も明記されています。すなわち、一般社団法人 三原青年会議所としての羅針盤であり、行動の指針です。今を生きる私たちに与えられた課題に対し、根本解決に向け英知と勇気と情熱を持って真摯に取り組む先には、必ずや素敵な笑顔が溢れていると信じます。

結びに本ビジョンに“夢”を託し、会員一丸となって「明るい豊かな社会の実現」を目指し、邁進して参ります。今後とも一般社団法人 三原青年会議所に対しましてご支援、ご鞭撻を賜りますことをお願い申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

1.2 担当委員長挨拶

まちの未来創造委員会
委員長　大迫　亘

この度一般社団法人 三原青年会議所のビジョンを刷新するにあたり、新ビジョン策定を担当するまちの未来創造委員会の委員長を務めさせて頂きました。2年前に入会した若輩者の私にとって重責を任されましたが、まずは現在までに策定された5つのビジョンを理解することから始めました。その中で、創立から11年後にあたる1973年には初めてのビジョンである「瀬戸のインターチェンジ "三原"－歴史と未来の調和した福祉都市へ－」を掲げ活動され、その後も時代の先を見据えたビジョンを次々と発表されておりますが、先輩諸兄の皆様のこのまちを想う意識の高さを改めて感じさせて頂き、私としても、この職務を全うすることを改めて決意させて頂きました。

これまでのビジョンはみはらの将来像を描いた「このまちのビジョン」と

いう形でしたが、今回のビジョンは社会全体を見据えた広い視野での活動も必要であるとの思いから社会部分を取り入れることで、また「何時までを目標にこうなっている」という企業の経営ビジョンのような側面も取り入れることで、会員全員が一丸となり邁進出来、これから入会してくる新たな同志にとっても活動の"参考書"として活用出来る内容を目指して策定を進めさせて頂きました。

本ビジョンの名称を決めるにあたり、私は世界中の人々が「幸せ」を感じられる将来とは、どのようなことかを考えた時、みんなが笑顔であることが幸せを感じていることであると思いました。そして、中期構想は当会議所の進むべき道標となければならないという考えの基に、委員会メンバー全員で検討し、「Direction Toward HAPPINESS—笑顔への道標—」とさせて頂きました。

最後になりますが、この新ビジョン策定に際し、多くの皆様にご意見やアドバイス等のご協力を頂き、誠にありがとうございました。この新ビジョンを基に、みんなが笑顔になれるように明るい豊かな社会の実現に向けて組織一丸となり、邁進してゆきたいと思います。今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

※青年会議所（以下JC）
※三原青年会議所（以下三原JC）
※日本青年会議所（以下日本JC）
※国際青年会議所（以下JCI）

～三原JCとそのVISION～

1.3 三原JCとは？

三原JCは「明るい豊かな社会」の実現を目指すまちづくり団体として隣市ですでに活動を行っていた尾道JCのスポンサーシップの下、1962年7月10日に設立し同年9月22日に日本JCより全国で220番目のLOMとして正式に承認されました。

LOM（各地青年会議所）は2014年9月1日現在で日本全国696の地域に存在し、全国会員総数は約36,000名となります。またJCIには日本JCを含め世界125カ国が加盟しており、JCは世界を股に掛けて活動するグローバルな組織であり、三原JCもその中に属しています。

私たちの活動としては「社会への奉仕」「個人の修練」「世界との友情」という不変の三信条の基、社会開発の為の公益事業や青少年育成事業、地域のリーダー育成の為の研修事業や会員の連携を図る交流事業、世界の繁栄と平和に寄与する活動等を実施しています。その中で、1976年の創刊から現在も続いている三原青年会議所新聞「やっさもっさ」の発刊や、1976年の第1回三原やっさ祭り開催から毎年やっさ祭り実行委員会に実行委員長等を輩出して祭りの運営に携わっていることは三原JCが長年に渡り継続して取り組んでいる事業となります。また会員が組織としてのまちづくりの方向性を共有する為に時代の先を見据えたVISIONをこれまで策定して参りました。

組織の大きな特徴としては、会員の在籍年齢資格は20歳から40歳までに限定しており、役職は1月1日から12月31日の一年間を事業年度単位として原則刷新する単年度制人事を採用しており、組織運営に関わる重要案件は、総会において会員全員による投票や決議により決定する為、親会を持たない独立した組織であることが挙げられます。また、組織はその年に必要と考えて立ち上げられる複数の委員会ごとに掲げた方針に沿って活動することで運営され、その活動費は会員一人当たりが年会費140,000円を負担することで賄っています。

三原青年会議所から見たエリア構成

地域単位の組織	LOM：三原青年会議所
都道府県単位の組織	BOM：広島ブロック協議会
地区単位の組	DOM：中国地区協議会
国単位の組織	NOM：日本青年会議所
世界単位の組織	JCI：国際青年会議所

1.4 これまでの私たちのVISIONとその取り組み

瀬戸のインターチェンジ“三原”－歴史と未来の調和した福祉都市へ－

1973年発表

1）　時代背景

①　工場誘致の為の埋立てによる工業用地開発が飽和状態にあった。

②　1972年に三原が山陽新幹線の停車駅に決定。

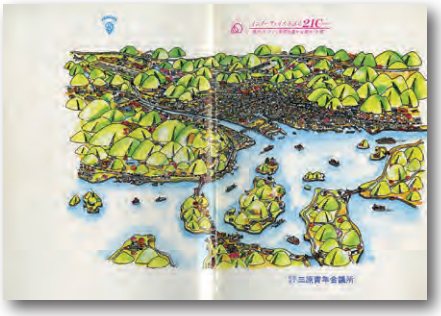
③　瀬戸内海大橋（尾道今治ルート）開発計画の実施が確実視されていた。

2）　概要

中四国のほぼ中心に位置する三原市が単なる交通拠点としての人・物・金の通過地ではなく、そこに渦まく情報の収穫地としてのコミュニティの場でなくてはならないとし、コミュニティーセンターとしての情報都市となることを目指した。

インターフェイスみはら21C －瀬戸、ロマン、国際色豊かな都市“三原”－

1985年発表



1）　時代背景

①　日本社会は高齢化・経済の成熟化・国際化・情報化等の環境条件の変化が始まっていた。

②　数年後に新広島空港開設が予定されていた。

2）　概要

21世紀は人・物・情報の交流が一層高密度になる社会と言われていた中で、これらを結びつける結束・連関の果たす機能、役割は不可欠な存在であったことから以下の4点を三原の果たすべき主要な役割として、その重要度を高めることを目指した。

①　広島の新たな玄関口

②　陸と海の新たな結束点

③　備後・中央・広島・備北との連結

④　三原を取り巻く周辺地域の拠点

New Gravity　みはら －ドラマチックな出会い!広域交流都市－

1992年発表

1）　時代背景

①　地方の時代と叫ばれ、都市間競争が激しくなっていた。

②　1993年の新広島空港開設、1995年の県立福祉短期大学開校を間近に控えていた。

③　バブル崩壊直後であったが、好景気の余韻が残っていた。

2）　概要

都市間競争の激しい中、21世紀に対応した新たな広域交流都市圏構想に基づき、ハード面は広域交通網整備、ソフト面は広域交流促進財団をバックアップの柱とし、自立する都市、広域交流都市三原の創造を目指した。

Vision2001 コラボレーションシティ21

2000年発表

1）　時代背景

①　高速道路や橋、空港等のハード面の整備強化が落ち着いた時期。

②　価値観の多様化や経済や情報のグローバル化が進んだことにより従来の中央集権的な体制下での「上から下へ」「下から上へ」という「タテ社会構造」では解決出来ない数々の問題が生じていた。

2）　概要

時代の変革期において、これまでと同じ考え方やシステムでは到底対応出来ない状態が目の前に迫っていた中で、市民協働型社会の実現が必要であるとの考えから以下の3点の提言を行い、グローバルな視点から社会全体を視野に入れ市民が主役の「共生共創社会」の実現を目指した。

①　市民参加・市民協働によるまちづくり

②　情報公開による開かれたまちづくり

③　効率よい行政への転換

VISION 三原の誇想（こそう） 創力（そうりょく）

2005年発表

1）　時代背景

①　2005年3月22日に旧三原市・旧豊田郡本郷町・旧御調郡久井町・旧賀茂郡大和町が合併し、新三原市となった。

②　新三原市となり駅・港・高速道路IC・空港が揃う都市となった。

2）　概要

このまちの持つ可能性を市民・企業・行政・NPO・学校が手間をかけ、活かし、創り育て続けるという真の三原の力が必要であるという考えの基、以下の3点をキーワードに三原市が10年、20年先でも都市間競争の中で存在感を示し豊かなまちであり続けることを目指した。

①　資質の高い三原市民づくり

②　市民が一体感を感じられるもの

③　まちのオリジナリティ（誇りあるまちの創出）

1.5 The 6th Brand new VISION

この度私たち三原JCではVISION（中期構想）を抜本的に改定することにしました。私たち三原JCの活動目的は『明るい豊かな社会の実現』であり、その為に重要な事柄はその時代にある問題・課題を正しく捉え、それに対して活動を実施してゆくことです。前回の一市三町の合併を機に発表したVISIONから時代と環境が変わり、私たちには新しいVISIONが必要になりました。

過去のVISIONを振り返ると、昭和の時代と共にあった高度成長期ではわがまちは発展途上ゆえに様々な問題・課題があり、それに取り組むことがメインであったように思えます。そしてバブル崩壊と共に高度成長期も終焉を迎え、次にいざなみ景気とも呼ばれるように一見穏やかですが安心した未来を見出せない混沌とした平成の時代を迎えます。その時代のVISIONではインフラよりも人と人の問題が多く考えられ取り組まれて来ました。またこれまでの私たち三原JCのVISIONは三原JC自身の中期構想ではなく三原の中期構想を描いたものでした。

今回私たちが描く新VISIONは、今後縮小してゆくであろう地域・社会の中でいかに明るい豊かな社会を築くか、ということが根幹にあります。その中で現在の私たちが抱える問題も地域固有の問題よりも社会的問題・国際的問題が多くを占め、同時に私たち三原JCの活動も広域的活動にシフトして来ています。今回のVISIONはそのような背景の基、対象を社会と地域に分け、右ページにVISION（取り組み）を出来るだけ読みやすく具体的に掲げ、一方の左ページにはその取り組みの基となる問題意識を記載することでなぜその活動が必要なのかを明確にしました。特に今回は私たちの価値の基準となり判断の基準となる私たちの歴史・文化・憲法にも触れ、可能な限り取り組みの根拠・背景を記載しました。

第２章　これからの私たちの課題

2.1 全ての人々の平和・人権・幸せ

私たちJCは周りの身近な人・まちは勿論のこと、世界中の人々が笑顔で幸せに暮らせる社会を望んでいます。しかしながら世界の一部では今日も人同士が憎しみ合い戦争が起きています。そして貧困や飢餓に苦しんでいる人々がいます。治せる病気を治すことが出来ず命を落とす人々もいます。世界中の人々が笑顔で幸せに暮らせる社会になるには誰かに期待するだけ、待っているだけでは叶いません。世界から見れば私たち三原JCは小さな存在ではありますが、私たちにも出来ることはあります。これからの私たちはそのような事柄に対して確かな問題意識を持ち世界中の人々が笑顔で幸せに暮らせることを望み活動します。私たちJC会員の胸章には国際連合と同じ地球儀のマークが入っています。これは私たちJCが世界に広がる国際的な民間公益団体（NGO）であることの証しであると同時に、それを担う団体であり会員であることの証しです。

関連 >> 2.1,2.2,2.3,2.4

国際連合旗

JCロゴ

ストリートチルドレン©Mashroor Nitol

ストリートチルドレン©AndrewMcLagan

イラク戦争©james.gordon6108

アフガニスタン紛争

第3章　これからの私たちの取り組み(VISION)

3.1 ■ 各エリアJCへの参画及び近隣JCとの連携の強化

各エリアJCは社会の発展の為に、広くは世界から身近では地域までエリアごとにそれぞれが直面する課題・問題に向き合いより良くなることを目指して活動をしています。私たち三原JCはそのような各エリアJCの活動に賛同しこれまで以上に連携や協力を強化します。具体的には多くの会員がそれらエリアJCに出向してワールドワイドな組織力を活用し地域だけでなく広域でも力を合わせ活動することで、私たちの目的を達成することを目指します。JCIでしか得られない社会貢献活動の意義とその貴重な経験。国家単位で取り組むべき国の未来の創造。そこで出会う新たな同志。これらは私たちJCにとって重要な経験でありそれが個々の会員の能力向上に繋がります。またそれらは他のまちづくり団体にはない私たちJCであればこその活動です。これからの私たち三原JCは地域JCごとに実施している同様の事業を近隣地域JCと連携実施することで、より効果的に効率的な活動をしてゆきます。

関連 >> 2.1,2.2,2.3,2.4

＜事業＞

- ● JCI・日本JC・地区・ブロック協議会の主催する各種会議・フォーラムへの積極的参加
- ● 同各エリアJC組織への積極的な出向者の輩出
- ● 同各エリアJCとの共同事業の実施
- ○ 近隣JCとの連携事業の実施(例会事業・会員研修事業・交流事業・その他)

事業案の種別＞＞

■＝実施中or継続事業
●＝新規実施確定事業
○＝今後実施する可能性のある事業
★＝提言・主張

©Aurimas Adomavicius

©Vanessa Kay

2.2 日本の心

2.2-1　日本という国

わが国日本は四方を海に囲まれ豊かに恵まれた自然に溢れています。またそのような環境ゆえに他国からの影響も受けにくい地理的環境にあります。そのような環境のせいかわが国は万世一系の天皇を掲げ2674年の歴史を持ち“和”を尊び“徳”を重んじる国家です。わが国の歴史上の偉人である聖徳太子は十七条憲法を制定する上で「和・礼・信・義・智」を重んじました。「和を以て尊しとなす」という言葉に代表されるようにわが国ではその永い歴史の中で“和”を尊ぶ文化が培われて来ました。また天皇陛下のような“徳”の高い指導者によって倫理観の高さが育まれ、同時にその美徳は海外からも高い評価を得ています。

関連 >> 3.2-4

【教育勅語の口語文訳 抜粋】

私は、私たちの祖先が、遠大な理想のもとに、道義国家の実現をめざして、日本の国をおはじめになったものと信じます。そして、国民は忠孝両全の道を全うして、全国民が心を合わせて努力した結果、今日に至るまで、見事な成果をあげて参りましたことは、もとより日本のすぐれた国柄の賜物といわねばなりませんが、私は教育の根本もまた、道義立国の達成にあると信じます。国民の皆さんは、子は親に孝養を尽くし、兄弟・姉妹は互いに力を合わせて助け合い、夫婦は仲睦まじく解け合い、友人は胸襟を開いて信じ合い、そして自分の言動を慎み、全ての人々に愛の手を差し伸べ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格を磨き、さらに進んで、社会公共のために貢献し、また、法律や、秩序を守ることは勿論のこと、非常事態の発生の場合は、真心を捧げて、国の平和と安全に奉仕しなければなりません。そして、これらのことは、善良な国民としての当然の努めであるばかりでなく、また、私たちの祖先が、今日まで身をもって示し残された伝統的美風を、さらにいっそう明らかにすることでもあります。

～国民道徳協会訳文より～

2.2-2　日本人としての生き方

わが国は第二次世界大戦において敗戦国となり一時期連合国軍(GHQ)の占領下に置かれました。それは仕様がないことですがそのような特異な状況下で前述の“日本の心”がいくらか失われてしまった部分があるように思います。戦後新しい憲法と共に新しい時代が始まり経済的な成長を遂げたその一方で“日本の心”は捨てずこれからも培ってゆくべきものだと考えます。

しかしながら現在の日本はどうでしょうか。徳高い“日本の心”が失われている部分もあるように感じます。象徴的な事例として「いじめ」という問題があります。それは学校等の子ども社会のみならず、私たち大人に起因する問題とも言えるのではないでしょうか。昨今は公の場でメディアの強い立場を利用した「いじめ」とも捉えられる個人攻撃行為も見られます。またインターネット環境においても匿名の身勝手な発信により特定者を不快にする行為が見られます。このような道徳心の失われた大人の行為は、少なからず子どもに影響を与えているものと考えます。“和”を尊び“徳”を重んじることは自然国家である日本においては人間関係を構築する基本であります。私たち日本国民は陰険性を認めず批判・排除し、本来の“美しい国”であるべきです。

【十七条憲法現代語訳 抜粋】

第一条	人と争わずに和を大切にしなさい
第二条	三宝を深く尊敬し、尊び、礼をつくしなさい(三宝:釈迦、その教え、僧)
第五条	道にはずれた心を捨てて、公平な態度で裁きを行いなさい
第六条	悪い事はこらしめ、良いことはどんどんしなさい
第九条	お互いを疑うことなく信じ合いなさい
第十条	他人と意見が異なっても腹を立てないようにしなさい
第十一条	優れた働きや成果、または過ちを明確にして、必ず賞罰を与えなさい
第十五条	国のことを大事に思い、私利私欲に走ってはいけない
第十七条	大事なことは一人で決めずに、必ず皆と相談しなさい

関連 >> 3.2-1,2,3,4

3.2 徳育を推進し、日本の心を紡ぐ

3.2-1　徳育の推進

日本人が長い歴史の中で育んできた“和”を尊び“徳”を重んじるという精神を子どもたちに継承し、日本が“美しい国”であり続けるためには「国家百年の計は教育にあり」という言葉に象徴されるように、長い年月をかけて教育してゆかなければなりません。まずは、“徳高き”先人たちから受け継がれる精神の原点に立ち返り、日本人として生きる姿勢を見つめ直す機会を提供することが必要不可欠です。さらに、自虐史観に苛まれた意識を改め日本人であることへの誇りを取り戻すために正しい歴史認識を学ぶことの重要性を訴えてゆく必要があると考えます。これらを総称した『徳育』をキーワードに事業を推進し、日本の心を継承してゆきます。

関連 >> 2.2-2

《事業例》

○　土曜日授業の開催

○　みどりの少年少女団の立ち上げ

○　他学校との野外交流事業の開催

日本JCの推進する事業（徳パック）　徳パック　検索

3.2-2　★　地域教育の実施

学校教育でわがまち三原の歴史（小早川隆景・浮城・やっさ踊り・歴史等）について地域の博学な方を招いて授業を行ってはどうでしょうか。それによって地域の大人が子どもたちに郷土愛を育むことになります。子どもたちも地域のことを知り関心を持ち、郷土に対する想いが深まります。

関連 >> 2.2-2

小早川 隆景公

3.2-3　家庭教育の重要性

教育の原点は家庭教育から始まるのではないでしょうか。その家庭教育において重要なことは“愛情”と“礼節（躾）”だと考えます。愛情とは単に甘やかすということではなく子どもに対して関心を持ち「褒める」ことと「叱る」ことに他なりません。また人間関係を構築してゆく上で大切な「挨拶」にはじまり「敬意」や「礼儀」は、学校で教わることではなく家庭で教えてゆくべきことです。これらを日頃から家庭において実践することで“和”を尊び“徳”を兼ね備えた人格形成が成されてゆくものだと考えます。私たちはこれらの家庭における教育を広く啓蒙してゆきます。

関連 >> 2.2-2

《事業例》

★　家庭の徳育勉強会

★　武道を通じた徳育の推進

★　親子で取り組むオリエンテーリング・クッキング・夏休みの宿題等の事業の実施

3.2-4　★　社会・文化から伝える日本の心

私たちは学校教育だけでなく例えば日本の昔話を読み聞きする中においても物事の善悪や和の心等を学び育ちました。例えば「まんが日本昔ばなし」や「アンパンマン」といったテレビアニメは日本の心を育むことに大きく寄与したと言えます。しかしながら現在そのような学びの機会が薄れて来ているように感じます。このような日本文化を培う文化芸能を大切にしてゆかなければならないと私たちは訴えます。

関連 >> 2.2-1,4

©T.Kiya

©Pixelglo Photography

2.3 国家の課題

2.3-1　先進国として

第二次世界大戦以降のわが国は戦争放棄の憲法を掲げる一方で安全保障条約により強国に守られ今日まで無事に過ごして来ました。しかしながら今日のわが国は拉致問題、領土領海侵犯問題、言われなき批判等に苛まれています。わが国が真に独立した先進国である為には他国に頼るのではなく世界の平和を真に願う国として“和”と“正義”を持って前向きな国政を営んでゆくべきではないでしょうか。その為にはわが国のあり方を改め他人任せではなく独立した国とその国民としての気概を持って取り組んでゆくことが必要だと考えます。

関連 >> 3.3-3

2.3-2　近現代史

私たちは先の戦争をほんの六十数年前に起こったにも関わらず正しく理解されていないように感じます。またその中で敗戦国ゆえに現在も言われもない責任まで背負ってしまっている部分もあり、それゆえに私たち日本国民は生まれ暮らす国に対して嫌悪の気持ちを持っている国民も少なくないように感じます。もちろん過去の過ちは反省しなければなりませんが、わが国の全てが悪い訳でなくその一方で良い国でもあります。次の世代がまた同じように生まれ暮らす国に対して嫌悪の気持ちを持つのでなく、良い国に生まれて幸せだと感じられ、わが国を大切に思ってもらうことを願います。その為に私たちは正しい近現代史を学ぶと同時に、それを次の世代に伝えてゆくことが必要です。

関連 >> 3.3-3

日本国憲法の抜粋

第二章 戦争の放棄
第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
第二項 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

2.3-3　憲法

憲法とは、わが国と日本国民の言わば大原則･基本ルールといったものです。私たちを取り巻く環境や社会は日々変わり急速に発展しているにも関わらず戦後六十数年もの間憲法は一度も改正されていません。六十数年前の憲法の全てが現代にマッチするでしょうか。それとも私たちは憲法というわが国の基本ルールを真摯に受け止めていないのでしょうか。これからのわが国発展の為にそして次の世代が安心して暮らすことが出来る国である為に私たちには時代に即した最良の憲法が必要です。またこれまでの学校教育の場においては憲法を学ぶ機会は多くなかったように感じます。これまで不可侵とされ私たち国民も日々意識せず過ごして来た“憲法”というものを今真剣に考える時に来ていると考えます。

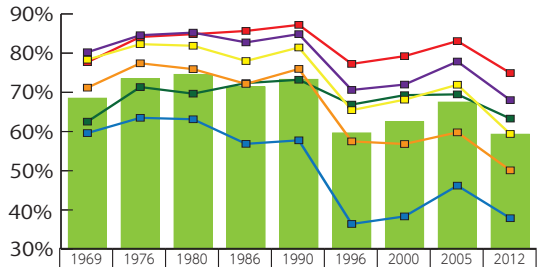
関連 >> 3.3-1

2.3-4　選挙

わが国は民主主義国家であり、選挙は市民国民にとって地域･国を誰に任せるのかを選ぶ最も重要な主権行使の機会ですが、その選挙において投票率は年々低下しています。投票率低下の原因の一つにわが国の社会状況が比較的充実して来たこともあるかと思います。市民国民にとって深刻な問題がなければ投票行動の欲求が生まれないのかも知れません。また一方で若者が20歳になって選挙権を得た時、それに見合った知識と見識が無ければ自らの意思で投票することは難しいのではないでしょうか。また学校教育の場等においてもそのような事前準備は充分になされてはいないように感じます。地域や国家の運営は今日のことだけではなく将来をも見据えてなされるべきものです。投票率が低い年齢層が生まれれば投票率が高い年齢層に支持を受ける施策を訴える候補者が有利になります。特定の年齢層の為でなく市民国民全体の政治である為には全年齢層の広い投票行為が必要です。

関連 >> 3.3-2

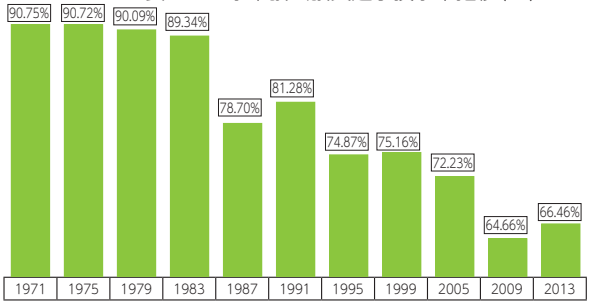
表-1　衆議院議員選挙投票率推移（%）



	1969	1976	1980	1986	1990	1996	2000	2005	2012
全体	68.51%	73.45%	74.57%	71.40%	73.31%	59.65%	62.49%	67.51%	59.32%
20歳代	59.61%	63.50%	63.13%	56.86%	57.76%	36.42%	38.35%	46.20%	37.89%
30歳代	71.19%	77.41%	75.92%	72.15%	75.97%	57.49%	56.82%	59.79%	50.10%
40歳代	78.33%	82.29%	81.88%	77.99%	81.44%	65.46%	68.13%	71.94%	59.38%
50歳代	80.23%	84.57%	85.23%	82.74%	84.85%	70.61%	71.98%	77.86%	68.02%
60歳代	77.70%	84.13%	84.84%	85.66%	87.21%	77.25%	79.23%	83.08%	74.93%
70歳代以上	62.52%	71.35%	69.66%	72.36%	73.21%	66.88%	69.28%	69.48%	63.30%

出典：総務省HP

表-2　三原市議会議員選挙投票率推移（%）



出典：三原市HP

3.3 より良い国へ

3.3-1 ● 憲法を学び、憲法への意識を高める

この国に暮らす国民として憲法という国のあるべき基本ルールを考えましょう。そしてこの国がより良くなる憲法にする為に、まず“知ること”そして“考えること”が必要と考えます。

日本JCでは2006年に「日本国憲法JC草案」を作成し、2012年10月にはその改訂版を発表し、現在では憲法セミナーの開催等憲法論議を推進する為の事業を展開しています。私たち三原JCは日本JCに賛同・協力して、私たちの憲法を考えてゆきます。

関連 >> 2.3-1

3.3-2 政治を学び、選挙への意識を高める

わが国の選挙は全ての国民が平等な一票を投じることが出来ます。その中で誰に任せればどのような未来が期待出来るのか、投票者の方々が充分に考え心有る一票を投じることが出来るように私たち三原JCは今後も重要な市政選挙・国政選挙等の際には候補者を公平に招き公開討論会やインターネットを利用した意見発表の事業を実施し、投票者の方々に候補者の情報を発信してゆきます。

また日本JCでも小中学生を対象とした政治啓発活動を実施しております。

関連 >> 2.3-4

- ■ 立候補者公開討論会の実施
- ■ インターネットによる公平な立候補者主義主張の発表(e–みらせん)
- ○ 若者世代への投票活動の喚起事業
- ○ 学校教育における近現代史・憲法・選挙(政治)の授業を拡充することの提言

3.3-3 領土領海問題を学び、国益への意識を高める

わが国は古来より海からの恩恵を受けた海洋大国として国家を形成してきました。しかしながら現在では近隣諸国による領土の不当な実効支配や領海侵犯により国益が侵害されています。日本JCでは領土領海侵犯問題等の調査研究から国民意識を高める事業を実施しており、私たちもそのような事業に参画することで領土領海問題と日本近海の天然資源について深く学び、わが国が近隣諸国から国益を侵害されることのない国家になることを目指してゆきます。

関連 >> 2.3-1,2

出典：海上保安庁

取組

～ 社会に対して ～

2.4　災害支援・東日本大震災を経験して

写真提供　三原市

私たちの暮らしの中では日々様々な災害に直面します。最近では今年（2014年）に起きた8.20広島市豪雨災害は私たちの身近で起きた悲惨な災害でした。このような自然の猛威を前にした時、人間の無力さを感じますが、一方で私たちにも出来ることはあります。それに取り組むのはJCとして最も根本的で重要な活動の一つです。

2011年に起きた東日本大震災は私たちが経験した中でも最大規模の災害でした。震災当時私たちも被災地の支援が少しでも出来ればと複数の会員で災害復旧ボランティアに赴き支援物資の送付も実施しました。そのような活動の中で様々な問題もありましたが非常事態の中で被災地を支援することの難しさを身に染みて感じた一方で、被災者の方々に多少なりとも喜んで頂けたことは有意義なことでした。

関連 >> 3.4

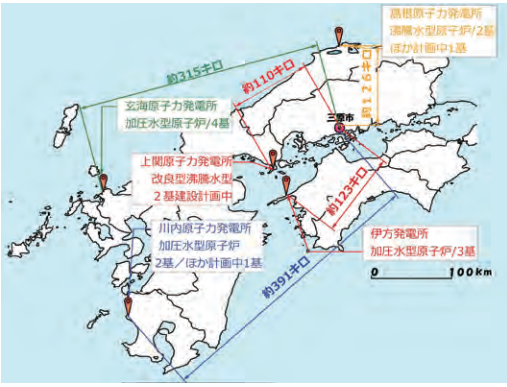
2.4-1　緊急時の対応

写真提供　仙台市

東日本大震災の非常時に私たちは速やかに支援活動に移れなかったことを検証し見直さなければなりません。私たちは数十名の会員からなる会議体であり通常時は年度ごとに計画・予算を組み会員の決議を取って実施に至りますが、このような突然起きる非常事態時にそのやり方では対応出来ません。私たちの目的は話し合うことではなく支援をすることであり緊急時には平常時と違う迅速に行動に移れる体制・ルールを事前に確立させておくことが必要だと考えます。

関連 >> 3.4-1

2.4-2　エネルギー問題



東日本大震災と同時に起きた福島第一原子力発電所の悲惨な事故はわが国とその国民、また世界に対して甚大な被害を与えました。また電力・エネルギーというものは私たちの社会・生活にとって重要で根本的なものだということを痛感しました。未来・次世代の為にもこれを契機に私たちは電力・エネルギーについてこれまでのように他人任せではなく国民全体で真剣に考えてゆく必要があるのではないでしょうか。

福島原発事故も同様に遠い東北の地で起きている他人事と済ませてはならないことです。日本列島は主に偏西風が吹いており、福島原発事故による放射性物質も多くは東側の太平洋に飛散しましたが、わがまち三原の西にも原子力発電所が複数あります。他人事ではなく私たちもエネルギーの恩恵とそれに伴う原発問題を真剣に考えなければなりません。

©Rikujojieitai Bou...

関連 >> 3.4-2

2.4-3　正しい情報の選択

私たちの社会・暮らしは日々発展し便利になっています。私たちが得る情報も様々な媒体を通して様々な角度から情報を受け取ることが出来るようになりました。その中で情報というものは、たとえ国を代表する主要なメディアであっても常に公平なものとは限らないということに私たちは気付き始めています。特に東日本大震災以降の原発事故・エネルギー問題の報道をきっかけにそのようなことを感じます。情報とは発信する側の意図がそこに大きく影響するものであり私たちはその一方的な情報を鵜呑みにするのではなく、多角的に客観的に受け止め正しい情報を選ぶ判断をしなければなりません。また一方で私たちの活動の中で発信をする側になる時には、出来るだけ主観的でなく客観的で正確な情報発信をすることを心掛けなければなりません。

関連 >> 3.4-3

3.4 災害への取り組み

困っている人･苦しんでいる人に対して、民間の立場として支援することは私たちの最も根本的で重要な活動の一つです。東日本大震災、またその他の災害に対して引き続き積極的に支援の機会を検討してゆきます。一方でそのような災害等の緊急時において迅速に対応出来る体制(オペレーション)がなければその実施は叶いません。

○　東日本大震災の継続支援

未曾有の大災害であった東日本大震災は未だ復興を終えていません。今私たちにできる支援は何かを今後も検討し実施してゆきます。

○　被災地の視察

震災の支援をする為に重要な事項はまず知ることです。想像ではなく実際の現地に行かなければ何が問題か、何をするべきかは見えて来ません。また被災地を訪れることだけでも、それが現地との交流を生み、経済的な支援にもなります。

★　日本JCとの連携した被災地支援

日本JCでは震災以降、毎年東北の地で震災復興フォーラムを開催しておりました。私たち三原JCもそれに賛同し今後災復興にそのような活動があれば積極的に参画してゆきます。

3.4-1　●　緊急時災害支援オペレーションの確立

災害というものは突然に起きます。そこで私たちはこのような緊急時に即時に行動が出来る規則が必要です。トップダウンもしくは数名の責任者の決議で即支援活動および予算の投入ができ同時に他JCとも連携･連絡出来るよう事前に連絡網･担当者を明確にして配信する緊急時オペレーションを作成します。

関連 >> 2.4-1

3.4-2　○　エネルギー問題に対する意識の向上

原発は再稼働すべきか否か。再稼働するならば、数千年続く放射能物質をどう処分するのか。再稼働しないのならばその代替エネルギーは何か。火力発電は本当に未来のないエネルギーなのか。高額な再生エネルギー(太陽光発電等)を国民の負担で推進すべきなのか。これらは私たち日本国民が考えるべき重要な事柄です。その答えは未だ見えませんが国民全員が真剣に考えて答えを模索してゆかなくてはならない重要な問題だと考えます。

関連 >> 2.4-2

3.4-3　★　正しい情報の取捨選択を学び、正しい情報の発信を学ぶ

私たち三原JCが活動する上で正しい情報は必須です。間違った情報を基にしていては意義ある活動は出来ません。そこで私たちは多岐にわたる情報の中から正しい情報を選択することを学び、また私たちが実施する事業においては正しい情報を発信することの重要性について学ぶ機会を作ります。

関連 >> 2.4-3

2.5 社会情勢の変化

2.5-1　人口減少時代を迎えて

わが国の合計特殊出生率（1人の女性が一生のうちに出産する子どもの平均数）を調べると、第二次世界大戦以前は4倍程度と高くありましたが、戦後高度成長と共に落下の一途を辿り、1974年には合計特殊出生率が人口置換水準(人口維持の為に必要な合計特殊出生率2.07 ～2.08)を下回りました。しかしながらその当時は長寿化と出産適齢年齢の比率が高かったことによって即人口減少とはならず、それから十数年後の2010年を境に人口減少の時代を迎えました。また稼ぎ手である生産年齢人口（15 ～64歳の人口）も昭和60年頃からすでに減少に転じています。ゆえに今後人口置換水準を回復したとしても人口が増加に転じるのはそれから十数年先であることも明確です。

なぜ出生率が下がったのかその原因を考えてみると、それは私たち日本人の生き方の多様化等であり否定すべき事柄ではないですが今後当分の間人口増加に転じる可能性は低いことは明らかなので、私たちはそれを正しく受け止め受け入れると共にそれらを踏まえてこれからを考えてゆかなければなりません。

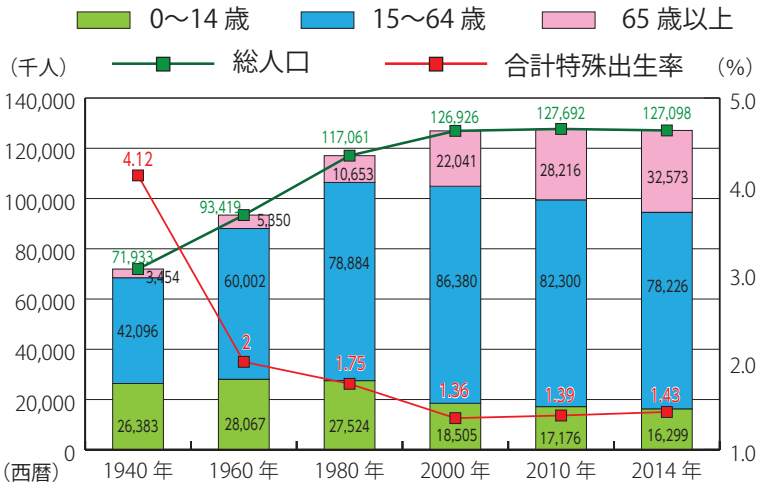
関連 >> 3.5-1,2

2.5-2　高度成長の終焉

わが国は戦後著しい高度成長を果たしました。それは急激なインフレーションが発生し、個人所得は伸びていましたがバブル崩壊以降、平衡時代の考え方・やり方に変えてゆかなくてはなりません。しかしながら今なお高度成長期と同様の政策が続き国は大きな借金を抱え、私たち国民は未来に不安を感じています。

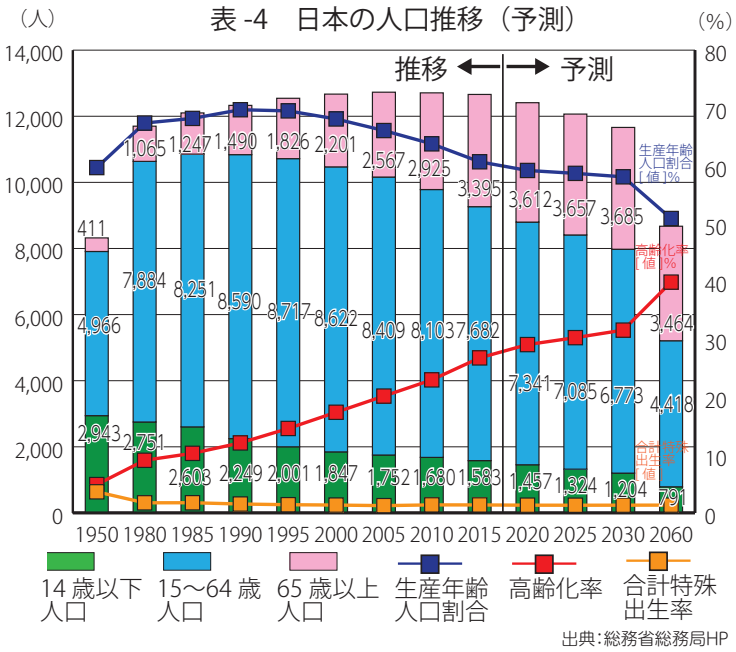
関連 >> 3.5-1,2

表 -3　日本の総人口推移



出典：総務省総務局HP

表 -4　日本の人口推移（予測）



出典：総務省総務局HP

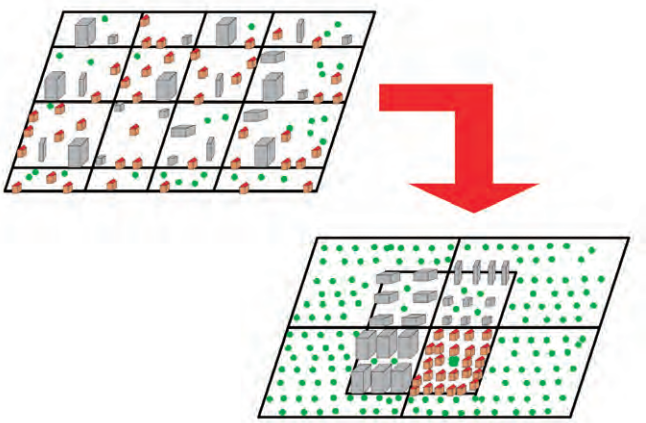
～ 社会に対して ～

課題

3.5 現状を受け止め「これから」の時代へ

人口減少時代を迎え、少子高齢化は現在においては受け入れなければならない現実問題です。それらから目をそらすのでなく、根拠のない成長論にすがるのではなく、現状を正しく理解し向き合いその上で未来を予想し計画を立てなければなりません。

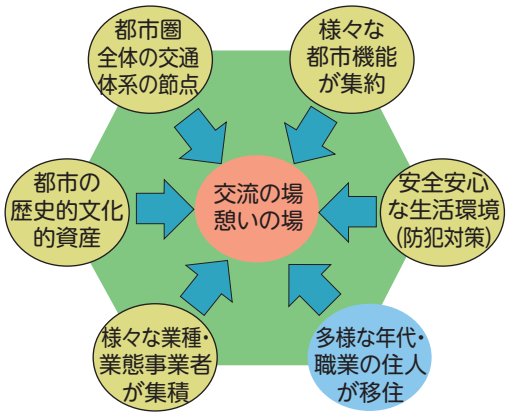
関連 >> 2.5



3.5-1　★　縮小社会に向けた都市政策の提言、コンパクトシティの検討

わがまち三原も高度成長期時代にはまちの規模をどんどん拡大してゆきました。しかしながら今後は縮小する社会でありその広げたインフラの維持が今後の私たちの重荷(負担)になってくることは想像に容易です。ここで今一度都市計画を今後の縮小社会に添ったものにし、なるべく無駄やコストを削減した効率の良い政策に変えてゆくべきです。さらにコンパクトシティという都市政策も取り入れ、これから時間をかけて暮らしやすく効率的なまちを目指し創ってゆく転換期に来ています。そして現役世代と高齢者とで役割を分担しつつ新しい社会を構成してゆく必要があります。

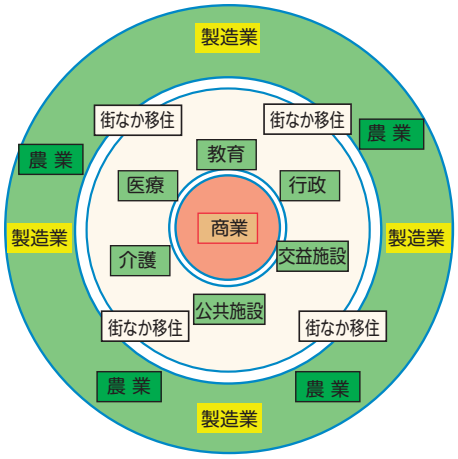
関連 >> 2.5-1,2



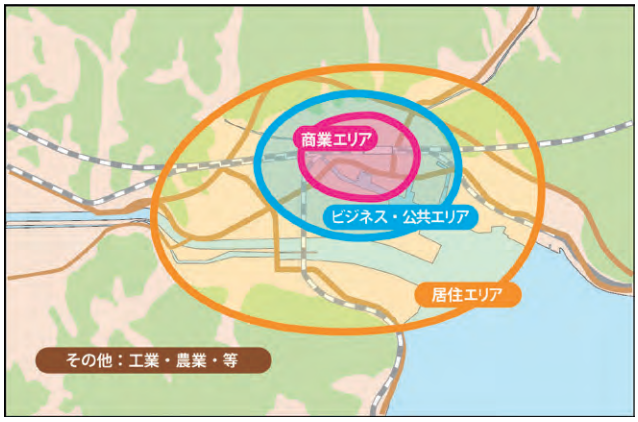
3.5-2　★　行政サービスの民営化への推進

縮小社会で私たち国民の負担が無尽蔵に増加してゆかない為にも行政サービスの民営化を提言します。行政サービスでは市民国民全員に均等なサービスを提供することが目的であり、またそうあるべきではありますが、その結果コスト面では高額になります。一方で民営化となると費用対効果が第一の目的となるので効果的効率的な運営になりそのコストは減少します。行政サービス全てを民営化するべきだとは思いませんが、可能な所から民営化を推進し国民負担を減らし縮小社会に対応してゆくことを提案します。

関連 >> 2.5-1,2



©Yoshikazu TAKADA

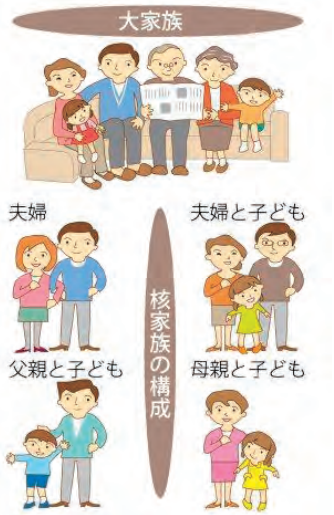


2.5-3　社会保障問題

戦後に始まったわが国の社会保障制度は、積み立て制（自分が掛けたお金を自分が老後に受取る）でスタートしました。しかしながらいつの間にか賦課制（「今日」集まったお金を「今日」の受給者に配る）に変わってしまいました。「若者が年金を納めないと高齢者の年金が支給出来ない」等と報じられていますが、それでは元々受給者が掛けたお金は一体どこへ行ったのでしょう。この制度はまず根本的な改革が必要であると同時によりオープンな体制へと変わらなければ信用することが出来ません。また掛け金を失ったことで次世代がそれを償うのはおかしな話ではないでしょうか。さらに今後は人口減少・少子高齢化により若年一人が支える高齢者数が増加するので現行の社会保障制度が立ちゆかなくなるのは当然の問題だと考えます。

関連 >> 3.5

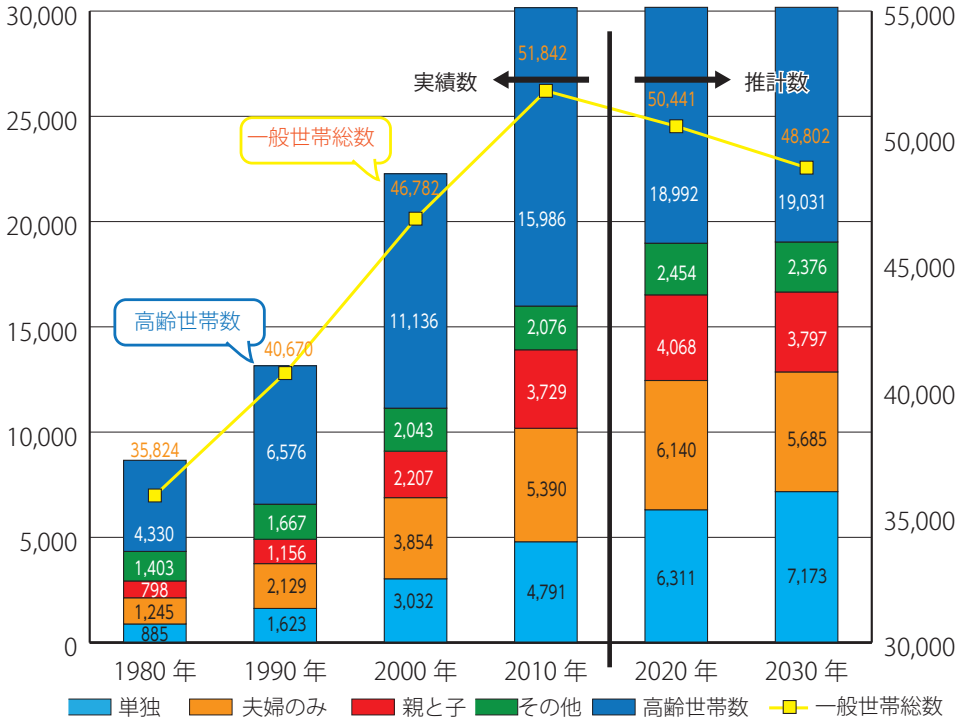
2.5-4　核家族化



現在の私たちは生き方や仕事の多様化等によって高齢化した親と共に暮らす複数世代同居の比率が下がってきております。昔は祖父母から孫まで３世代を持って家族を形成している世帯も多くありましたが、現在においては家族＝単独世代と言っても良いほどに核家族化は進んできました。さらに全国的に高齢化率が高まっている中、この問題は現在の私たちの大きな課題でもあります。別々に暮らす年老いた親をどう支えるのか。また祖父母が担っていた家庭の教育力をどう補うのか。より高額な社会保障費を負担して年老いた親を国に任せるのか。それとも子どもが支えるのか、私たちは考えなくてはなりません。どちらも選択しないということは国の借金を増やし次の世代に負担を背負わせることになります。

関連 >> 2.7-3

表 -5　高齢世帯数及び一般世帯数の推移



出典：国勢調査　国立社会保障・人口問題研究所

三原の移り変わり

新幹線開通前の三原城跡　昭和37年７月

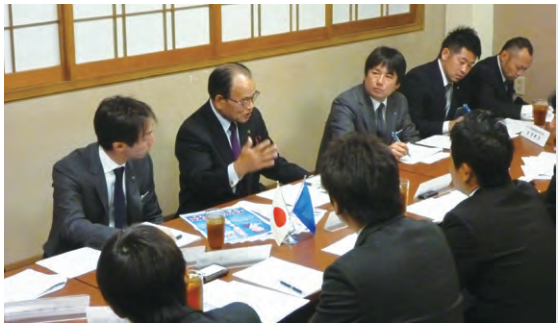
2014年の三原駅前付近　撮影:由水忠相

三原駅前の噴水　昭和36年11月

2014年の三原駅　撮影:田坂礼人

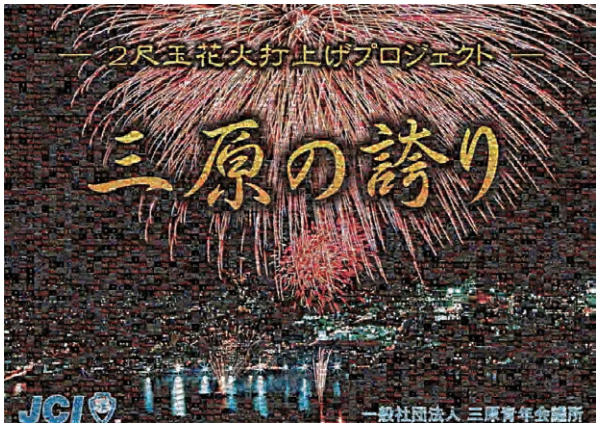
三原 JC の社会活動

第1回カレーライス会



行政との懇話会(カレーライス会)にて1968年長尾正三市長から始まり、2014年天満祥典市長を囲んで

２尺玉花火打ち上げプロジェクト



２尺玉花火プロジェクトカタチ編　モザイクアート

2.6 わがまちの現状

2.6-1　人口流出・過疎化

わがまち三原が継続的に発展してゆく為には成長してゆくことが必要であり、それには人口の増加や企業の繁栄等が重要な要素となります。しかしながらわがまち三原には人口減少・少子高齢化といった前述の社会問題に加え「過疎化」が進行してきています。その結果わがまち三原は随分前から転出が転入を上回る転出過多の状況が続くと同時に死亡者数が出生者数を超過しており、市町村合併の影響を踏まえた上での算出をすると1985年頃から既に実質人口の減少に陥っています。人口流出は地域に対して経済の低迷、消費減、市場縮小、税収減等、様々な影響をもたらしまちの活力の減少に繋がりますので、人口流出を食い止め、出生率・転入率を上げることが出来ればわがまちの活力は自ずと向上してゆくはずです。その為には他にない革新的な都市施策・市民活動を打ち立てそれを強力に推進してゆくことが必要です。

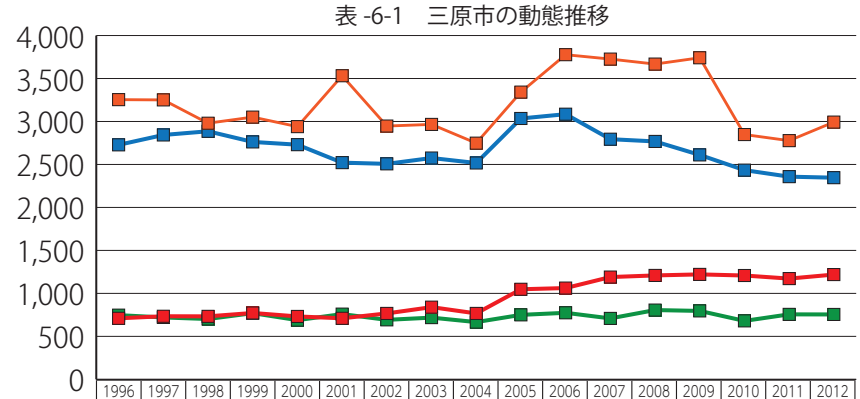
関連 >> 3.6

2.6-2　定住から転住へ

経済の成長と利便性の向上と共に私たちの社会はますます多様化しました。その中で地域に生まれ、地域で働き、子どもを育て、親を支えるというこれまでの日本人の生き方も多様化しており、特に大企業や公共団体が転勤制度を推進して来たことにより、私たち日本人は暮らしを転々と変える時代になりました。その結果人が集まる大都市圏はインフラも整いより住みやすいまちになり、一方で人が転出した中小の都市は益々衰退してゆきます。豊かな生活や安定した職を求めれば、自分の生まれ育った地域を離れ大都市圏に転住しなければならない実情があるのではないでしょうか。それらのことが大都市一極集中にも繋がり、わがまち三原にとってはそれがまちの衰退に繋がる懸念事項となっています。

関連 >> 3.6

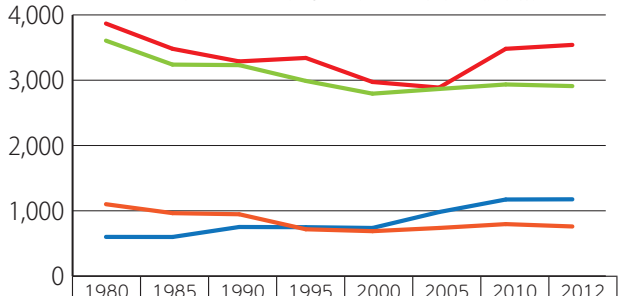
表 -6-1　三原市の動態推移



	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
転入	2,728	2,843	2,886	2,762	2,730	2,521	2,507	2,575	2,517	3,035	3,085	2,794	2,768	2,611	2,434	2,358	2,346
転出	3,254	3,251	2,980	3,051	2,940	3,532	2,947	2,966	2,748	3,342	3,777	3,726	3,668	3,741	2,848	2,777	2,993
出生数	747	720	702	770	689	759	692	718	666	750	774	709	806	796	680	756	755
死亡者数	710	734	733	772	732	710	767	840	767	1,048	1,062	1,190	1,209	1,221	1,208	1,172	1,219

出典：三原市

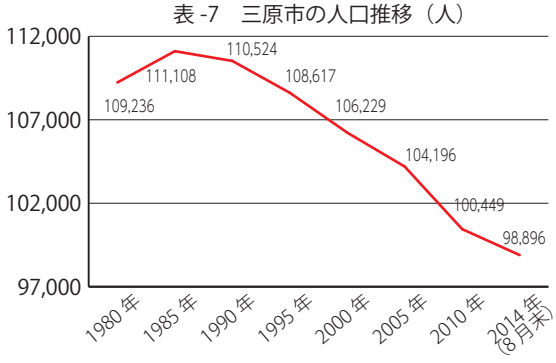
表 -6-2　三原市の動態の推移（長期）



	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2012
死亡者数	600	599	752	749	737	981	1,173	1,176
出生数	1,101	964	947	717	688	737	796	760
出生率	3,868	3,481	3,288	3,341	2,973	2,887	3,481	3,541
転出者数	3,606	3,239	3,231	2,989	2,794	2,866	2,935	2,910

出典：三原市

表 -7　三原市の人口推移（人）



出典：三原市

3.6 衰退を乗り越え発展する三原へ

3.6-1　好循環サイクルの構築

わがまち三原は前章で述べた通り人口流出･過疎化･少子化･高齢化といった人口問題に直面しています。その対策の為にはわがまちに転入を呼び込み、学生やUターン希望者の受け入れ態勢を整え、まちの活力が増加する好循環サイクルを構築することではないでしょうか。またそれにより現在の地方公共団体が抱えるその他の問題についても解決に向かうのではないかと考えます。まちの魅力を向上させ都市間競争･地域間競争に打ち勝つことも重要です。それにはわがまち三原は、どの分野で何を魅力とするのかを明確にしてまち全体で取り組んでゆかなければなりません。

関連 >> 2.6

3.6-2　★　大都市一極化から地域分散型社会へ

わがまちの高校を卒業した学生の多くが市外･県外の大学に進学し、そして就職をします。その結果、国全体の人口が減っている中でも、大都市は転入を増やし続け人口が増え続けているという状況にあります。この原因を追求すると大都市に様々なものが一局集中したわが国の社会構造が原因であり、国家としてもこれまでそのような体制を看過してきましたが、これからのわが国の形はその大都市の機能の多くを地方に分散させるべきです。私たちはそのようなことを訴えつつ､さらに分散化構造の受け皿となる都市を目指します。

関連 >> 2.6

3.6-3　★　優良な企業の誘致

人の暮らしの根幹は仕事にあります。いかに良いまちでもそこに良い仕事が無ければ暮らすことは叶いません。わがまち三原においても市民が安心して働き暮らすことが出来る企業を多く持つことが必要です。そこで私たち三原JCは他市以上の企業誘致政策の実施を提言します。具体的には三原ならではの流通･環境のメリットを訴えつつ工業地域の分譲単価の減額、新規移転企業に対する税制優遇、不動産取引における各種経費や路線価･評価額を減額することによる土地売買の活性化等を提言します。

関連 >> 2.6,2.7-2,3

3.6-4　都市開発　工業都市からバランスの良いまちへ

前述の通りわがまち三原は戦後工業都市として成長してきましたが、ここで一旦冷静に考え直してみると私たちが求めるまちの機能とは暮らし(生活･子育て･医療･老後)･仕事(雇用･需要)･消費と供給(商業･店舗)といったものがバランスよく必要ではないでしょうか。どれかが部分的に優れているよりそれらがバランス良く備わっているまちが魅力的なまちではないでしょうか。私たち三原JCは暮らしやすく仕事が充実し商業が発展したまちを目指して活動します。

関連 >> 2.6,2.7-2,3

3.6-5　★　子育て環境整備

人口流出を防ぐ手段として、子育て環境の整備に力を入れてゆきます。三原のまちが、子育てをする場所として魅力的であるかを他都市と比較して客観的に分析を行います。企業の育児休暇制度実施状況の調査、保育所の待機児童の問題についても改善を目指します。また子育てに直結する医療と教育のさらなる充実を目指し提言します。

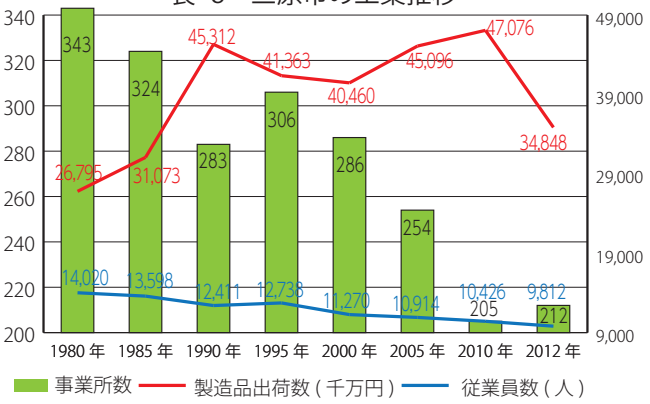
関連 >> 2.6

2.7 まちの衰退

2.7-1　まちの移り変わり

戦後のわがまち三原は数々の大企業の誘致により主には工業都市として発展し、ものづくり国家としてのわが国の高度成長を支えて来ました。しかしながら時代の変化と共にものづくり国家もその主流は製造業からサービス業に移り変わり、また輸出より輸入の増加、前述した人口減少も重なり、わがまちのような地方都市は元気がなくなってきております。また同時にそれは中心市街地・商店街は衰退を生み、わがまちも寂しくなってきております。

表 -8　三原市の工業推移



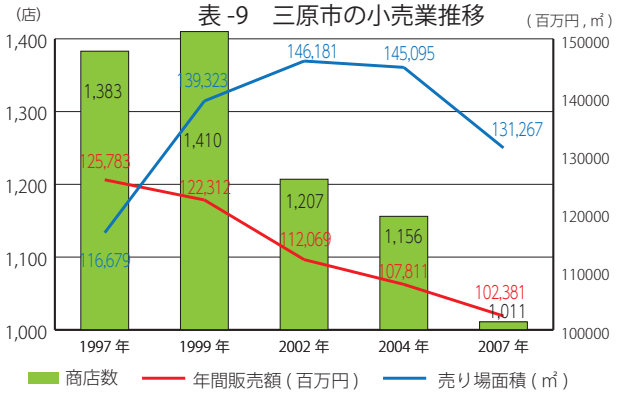
出典:広島県統計情報

2.7-2　工業と商業

工業では臨空部等の交通条件に恵まれた内陸部で集積が進み、主要製造業の出荷額は長期間横ばいの状況でしたが、近年は輸送用機械器具を中心に増加の兆候ですが事業所数・従業者数は減少傾向が続いています。商業では小売業の売り場面積は1997年以降増加傾向にありましたが、これは相次ぐ大型店舗の出店によるものと考えられます。その一方で商店数の減少や地価の大幅な下落から、中心市街地の衰退が伺え、商店街の人通りが少なく空き店舗が多く見られる等、多様な問題を踏まえ衰退から発展へ切り替えてゆく取り組みが必要だと考えます。

関連 >> 3.6-3,4

表 -9　三原市の小売業推移



出典:広島県統計情報

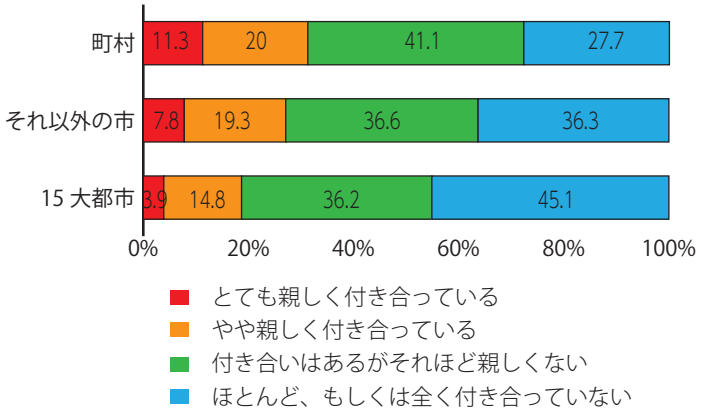
2.7-3　地域の繋がりの希薄化

現在私たちの社会は豊かになり多様化したライフスタイルなどの影響で家族の繋がり・地域の繋がりの希薄化が挙げられます。これは非常に難しい問題ですが、私たちはそのような現代社会の中で新たな人と人との繋がり「コミュニティ」を模索してゆくべきと考えます。

関連 >> 3.7-2,2.5-4

地域コミュニティについて

表—10　近所付き合い調査グラフ



3.7 魅力あるまちを創造する

筆影山から和田沖干拓地を望む　昭和40年10月

3.7-1　★　新たな三原の魅力の醸成

他都市にはないわがまち独自の魅力が必要です。それは祭りに代表される市民活動(祭りの多くは行政ではなくまちを愛する市民の心意気によって実施されています)であったり、また他にないわがまち独自の名物･名産であったりします。そういった三原市民が気づいていない見過ごしている三原の魅力をさらに発掘･熟成することで、他にないわがまちの魅力をさらに膨らませてゆかなければなりません。

関連 >> 2.8,2.9

恵まれた環境、暮らしやすさを発信

前述の通りわがまち三原はとても恵まれた環境にあります。その良さを再発見･再認識し改めて新しい形でPRをしてゆくことが定住促進･商業振興等において重要でありまちの繁栄に繋がると考えます。

★　三原ブランドとしてやっさ踊り･祭りを振興する

わがまち三原の最も特筆する点は何かと考えてみると､やはり｢三原やっさ踊り･祭り｣ではないでしょうか。それは全市民数の1/10もの踊り手が舞い、数十万人の来場者が祭りを楽しむわがまちの歴史をベースにした複合イベントです。またその運営には多くのボランティアによって支えられていることも特徴です。私たちはこの三原やっさ踊り･祭りを三原の代表するブランドとして振興してゆきます。

●　三原城築城450周年に向けて

三原城は2017年で築城450周年を迎え、またそれに向けてわがまち三原は450周年を好機と捉え盛り上げてゆく必要があります。

そこで私たち三原JCはこの築城450周年祭という機会を以下のような目的を実現する機会と捉え、2017年に向けて継続的に事業を実施してゆきます。

① **真に市民総参加で集い祝い楽しむ機会を目指します。(合併前旧３町含む)**
② **450周年までにやっさ踊り･祭りを真に県内一の祭りを目指します。**
③ **市外からの来訪者が多く訪れるこの機会にわがまち三原の魅力を充分に発信します。**

《事業例》　★　築城450周年に向けてわがまち三原の文化･歴史をドラマ･書籍に

3.7-2　新たな地域コミュニティ創造の支援

私たちが、笑顔で幸せに暮らす為にはコミュニティは欠かせません。かつては地域というくくりによって親密なコミュニティが作られていましたが、現在の都市部においては頻繁な転居･転勤等により暮らしは流動化しています。そのような中で地域コミュニティを以前のように充実することは困難です。そこで私たちはそれぞれの生き方に合った新しいコミュニティを考え提案･支援してゆきます。

《コミュニティの例》

① 企業(勤め先)コミュニティ
　会社において仕事に勤しむのみでなく社員同士の交流を活発化することで、共同体として支え合う
② 子育てコミュニティ
　同環境にある子育て世代のコミュニティを形成もしくは現在あるそれをさらに充実させ、共同して楽しむ･勤しむ･支え合える環境をつくります
③ 趣味のコミュニティ
　同じ趣味･興味を持つ人々が集まって共同体をつくり、楽しみ支え合う

2.8 わがまち三原・とても恵まれたまち

2.8-1　自然

わがまち三原は瀬戸内海式気候に属し他地域と比較して温暖で多照寡雨な気候です。自然災害も比較的少なく、瀬戸の海は海の幸に恵まれつつもとても穏やかで小舟でも気軽に海釣りに乗り出せるほど波も低く、総じてとても暮らしやすく環境に恵まれていると言えます。

関連 >> 3.7

筆影山からの眺望　撮影:田坂 礼人

2.8-2　歴史

歴史は縄文・弥生・古墳時代の遺跡が残されており、古くから人々の生活が営まれていたことがうかがえます。鎌倉時代から戦国時代にかけては小早川氏が台頭し三原城等が築城されました。江戸時代には広島藩の領地となり城下町として繁栄したほか、農業も発達しました。また本地域は古来より近畿と九州を結び四国と連絡する海上交通の要衝として発展すると共に、旧山陽道沿いの宿場として繁栄する等要地としての役割を担ってきました。

関連 >> 3.7

2.8-3　環境

現在では中四国地方の地域拠点空港である広島空港を有しており、山陽新幹線・山陽本線・呉線が一所に乗り入れる三原駅を有し、さらに駅からわずか300mで三原港や国道２号線に届き、山陽自動車道も市内を横断する陸・海・空の交通アクセスを兼ね備えた、類いまれな恵まれた環境にあります。

しかしながら、山陽新幹線では昼間に1時間に1本の発着ではとても便利とは言い切れないと思います。また広島空港は地域拠点空港ではありますが、車でのアクセスしか出来ないという欠点もあります。広島市内で車の運転が出来ない人や西区より西部の方は2012年12月に開港した岩国錦帯橋空港へ流れていると聞きます。また県東部の福山市内の方も無料駐車場のある岡山空港へ流れているとも聞きます。

海路においても時間を考えればしまなみ海道を使う人が多いと思います。それらの問題を踏まえこれからも陸・海・空が揃ったまちとしてよりPR出来るようにアクセスの改善等を進めてゆく必要があると同時にバイパス全線開通により通過するだけのまちとならないようにすることが重要だと考えます。

関連 >> 3.7
関連 >> 2.8-2

三原城下絵図（三原中央図書館所有）

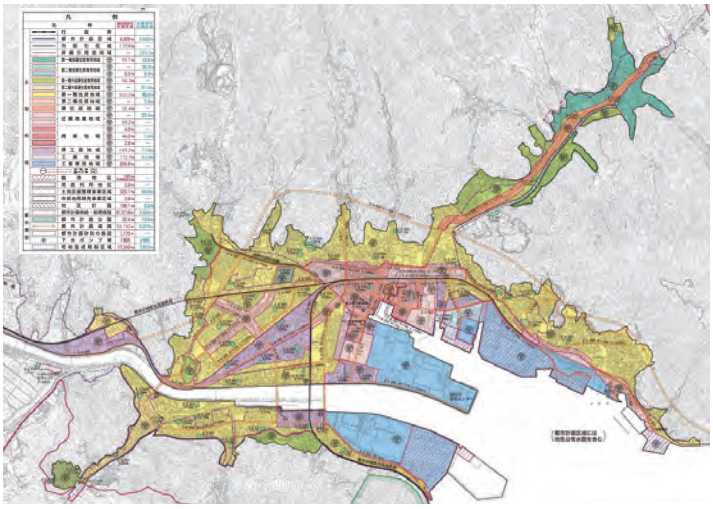
海から見た三原城跡（明治43年）

3.8 ハード面の提言

3.8-1　駅前再開発を提案

三原駅前では数年前よりペアシティ東館跡地の空き地化が問題になっております。そこへ市庁舎の移転の案もありましたが、その可能性も低くなったことから、私たちは東館跡地だけでなく三原駅前全体を捉え、将来的にどのような理想を描くかを考え今後提案します。その中で明確なことは、

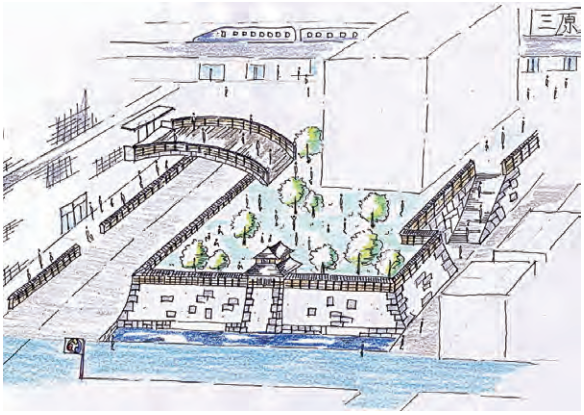
①駅前は商業エリアであること
②三原の歴史である三原城「浮城」の街並をキーワードにすること、
③各エリアの役割（ビジネス街・居住エリア・工場等）を明確に分けることでより暮らしやすく、利便性の高いまちを描きます。



3.8-2　恵下谷バイパス・空港アクセス道路・三原バイパス

公共構造物とは築造すれば終わりではなく維持費・修繕費・費用対効果までも考えて計画的に施工してゆくことが重要であり、さらに前述の人口減少時代を迎え少子高齢化による社会保障費の増大等によって今後の公共投資は縮小することが予測されます。しかしながらそのような中でも市内の北部と南部を繋ぐ険しい県道25号三原東城線（恵下谷）をバイパス化し交通の便を高めることは必須です。市内の北部と南部の往来を整備された道路によって活発化させることは私たちにとって生活面はもちろん経済面（ビジネス）においても非常に有益なことであり、もちろんそれは三原以北との往来の強化にも繋がり、また山陽道三原久井インターチェンジへの連絡道路にもなります。空港を持つまちであることを充分に活かすには三原駅前から広島空港へ迅速にアクセス出来る連絡道路も必須です。また国道2号木原道路の早期開通を希望し、「渋滞のまち三原」からの脱却が急務です。

関連 >> 2.8-3



2.9 三原やっさ祭り・踊り

2.9-1　やっさ祭りと三原

わがまちの伝統文化「三原やっさ踊り」そしてわがまちの最も盛大なイベント「三原やっさ祭り」これは他にないすばらしいわがまち固有の財産であります。三原やっさ踊りは永禄10年（1567年）小早川隆景による三原城の築城を祝い、民衆が自由気ままに楽器を鳴らし祝杯と共に踊り始めたのが由来とされています。また祝い踊りゆえに楽しく踊るのが特徴で踊る側も見る側も楽しむということがこの踊りの特徴です。そしてそれを基に昭和51年（1976年）に始まった三原やっさ祭りは今年で39回目を迎え、そこに集う踊手は多くの市民で溢れわがまち固有の祝いの踊りを駅前コースに盛大に繰り広げます。それは民衆（市民）が主体となって運営し、踊り、そしてみんなで楽しむ「祭り」です。各市町にも様々な踊り・祭りがありますが地域外からの踊りチームが集う「ダンスパレード」的な祭りも多く、やっさ祭りのようなまちの貴重な伝統芸能をルーツにした祭りは希少です。このように客観的に見ると三原やっさ踊り・祭りはとても貴重な文化・市民活動であり、現状にとどまらず今後もさらに多くの可能性を秘めたものです。この他地域にない私たち独自の祭りをより発展・成熟させてゆけば、三原はもっともっと元気になると私たちは確信しています。

関連 >> 3.7-3

2.9-2　やっさ祭りと三原JC

私たち三原JCは、やっさ祭りを運営している祭り実行委員会の一翼を担っております。昭和51年の祭り立上げ時から私たちは「実行委員長」「事務局長及びその補佐」「踊り委員会」「安全対策委員会」等の業務を担って来ました。それ以外にも委員会担当とならない各種業務も様々に担当しています。

三原やっさ祭り組織運営体系図

三原やっさ祭り振興協議会
目　　的：祭りの振興
主な構成：三原商工会議所
(一社)三原青年会議所
(一社)三原観光協会
三原市役所
その他各種団体

理　事　会
事　務　局
財務委員会
評　議　会
顧問・参与

三原やっさ太鼓育成会

三原やっさ祭り実行委員会
目　　的：祭りの実行
実行委員長：(一社)三原青年会議所
副実行委員長：三原商工会議所・(一社)三原観光協会・三原商栄会連合会・三原市役所
事　務　局：(一社)三原青年会議所・三原商工会議所
専門委員会：(一社)三原青年会議所・商工会議所・三原食品衛生協会 等

3.9 祭りでまちを盛り上げる

3.9-1　より多くの市民が楽しみ、関わる祭りへ

■　やっさサポーター（市民による祭りボランティア）制度の継続的推進

祭りを愛する市民は多くいます。しかしながら祭り実行委員会でその方々を受け入れ協力して頂くに充分な体制がこれまではあまりありませんでした。2014年度にスタートしたやっさサポーター制度を継続して取り組み、より多くの市民の皆さんが力を合わせて祭りを盛り上げたいと考えます。

■　旧3町（久井・本郷・大和）と共に楽しむ祭りにする

やっさ祭りは三原市をくくりとして市民総参加で楽しむという主旨の祭りです。その歴史を考えると三原城周辺の祭りと捉えられるかも知れませんが、そうでなくわがまち全体の最大のお祭りとして三原市全体で楽しむ機会にしたいと考えております。そこでやっさ祭りにおいて「やっさ踊り」のみを実施するのではなく各地の様々な伝統文化・芸能等も取り込んだイベントを企画してはどうでしょうか。旧3町の方々にも8月のやっさ祭りを楽しみに迎えてもえるように、実行委員会の政策が必要です。

■　観光資源として、三原ブランドに

これからのやっさ祭りは、市民が楽しむのと同時に遠方からも観覧を楽しみに来てもらえる観光資源として、そして三原のまちが潤う機会として成長させてゆくことも重要です。その為にはさらなる「見応え」が必要です。踊りの見応え、祭りのスムーズな運営、より快適で楽しい会場等に取り組んでゆかなくてはなりません。

■　自由な踊り・曲のパレードの新設

三原やっさ祭りでは、勿論やっさ踊りがメインではありますが、より多くの市民の参画を目指しこれまでのやっさ踊りだけでなく自由な踊りを自由な音楽でのパレードも実施してみてはどうでしょうか。特に中心部以外の市民の方々、また若者たちにとってはそちらの方が取り組みやすく出場しやすい場合があります。やっさ祭りが目指すのは市民総参加ですので市民の皆さんにより様々な機会を提供してゆくべきと考えます。

3.9-2　やっさ踊りの振興

■　子どもやっさの推進

やっさ祭りで開催される「子どもやっさ」への出場の推進もこれまでも取り組んで来ましたが、今後も重要課題として取り組んでゆきます。具体的には実行委員会内に子どもやっさ推進の為に専門委員会の設置を検討して参ります。

■　祝い事の際にはやっさを踊る風習を

やっさ踊りの歴史を調べると、祝い事の際にはやっさで始まりやっさで終わるという習わしがあったようです。近頃はあまり聞きませんがそのような伝統文化を見直し振興してゆきましょう。

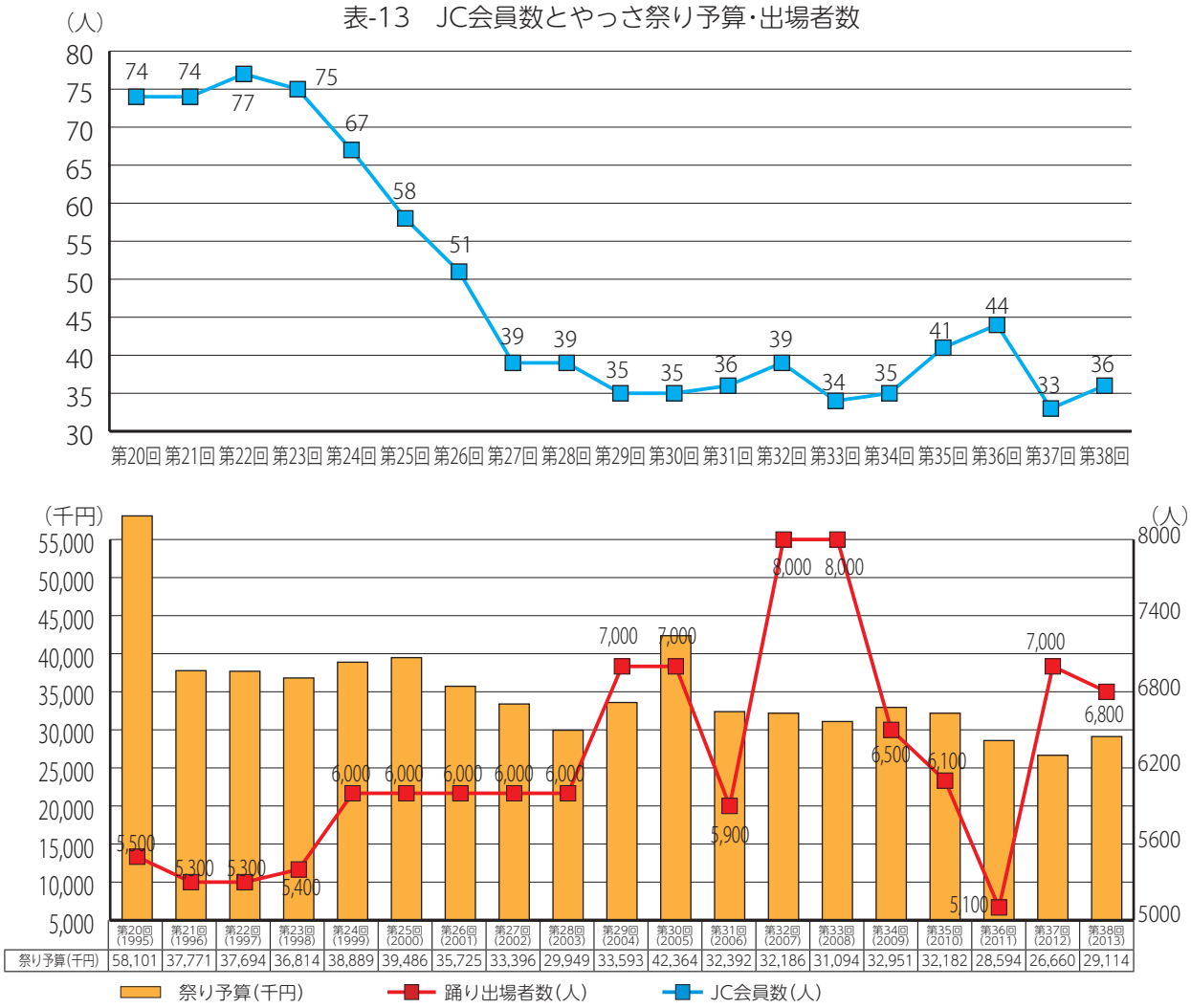
2.9-3　やっさ祭り運営の課題

この39年続いた三原やっさ祭りも社会情勢と共にあります。かつての高度成長期には祭りもおおいに盛り上がりました。その理由の一つには祭り実行資金（協賛金）が潤沢であったことがあります。祭り規模＝資金規模でもあり、当時は集まる資金をどうやって有効に活用するかに尽力していたと聞きます。しかしながらバブル崩壊以降祭り実行資金（主に協賛金）は右肩下がりとなり、現在においては前年同様の祭りを前年より少ない費用で如何に実施するかと知恵を絞っています。合わせてやっさ祭り実行委員会を組織する私たち三原JC会員や他団体の組織力（会員数）の低下も問題となっております。私たち三原JCもこれまでのような人員を祭り実行委員会に出向させられなくなってきています。私たちはこのやっさ祭りによってわがまち三原を盛り上げてゆきたいという強い気持ちを持っていますが厳しい状況の中、それを実現するには抜本的な改革をしなければ、その未来は見えてこないのではないかと危惧しております。

第39回やっさ花火フェスタ２尺玉花火　撮影：龍王　勉

2.9-4　やっさ祭りの組織運営

表-13　JC会員数とやっさ祭り予算・出場者数



	第20回(1995)	第21回(1996)	第22回(1997)	第23回(1998)	第24回(1999)	第25回(2000)	第26回(2001)	第27回(2002)	第28回(2003)	第29回(2004)	第30回(2005)	第31回(2006)	第32回(2007)	第33回(2008)	第34回(2009)	第35回(2010)	第36回(2011)	第37回(2012)	第38回(2013)
祭り予算(千円)	58,101	37,771	37,694	36,814	38,889	39,486	35,725	33,396	29,949	33,593	42,364	32,392	32,186	31,094	32,951	32,182	28,594	26,660	29,114

3.9-3　祭り成長戦略

■　『やっさ祭りを支える会』の立ち上げ

前述のような厳しい祭りの運営状況を打開する為、三原JC（会員資格は40歳迄）を卒業した方々から有志を募り、新たに祭り運営の一翼を担う任意団体を立ち上げることを提案します。それが叶えば祭りにとって必ず大きな力になると信じます。

■　既存体制の改革

昭和51年にスタートしたやっさ祭りの運営組織ですが、社会環境も変わり形骸化している部分もあります。そこで今一度現状を踏まえ、様々な参画団体で今後どのような組織体制で運営してゆくかを今一度話し合い明確化しなければならない時期に来ていると感じます。

■　単年度制の改善

私たち三原JCは一年ごとに人事を更新する団体ですが、長期に渡り継続してゆくやっさ祭りにおいては毎年リーダーや各委員長等が変わることは良いことではありません。祭り運営者は充分な知識と経験とリーダーシップを持って継続的に取り組んでゆける方が相応しいと考えます。よって私たちは他組織とも連携しつつそのような継続的なリーダーが担うよう模索してゆきます。

■　これまで以上の行政の参画･協力を

三原やっさ祭りの特筆する点の一つは市民による市民の為の祭りであることですが、多くの実行委員会メンバーは普段はそれぞれに仕事や家庭を持つボランティアスタッフです。これほどの大きな事業を実施し、またさらに成長させてゆくには祭りの業務を専属的に担って頂ける方々の強力なサポートも今以上に必要です。そこでこれまでも大きな力添えを頂いている行政の方々に今以上の参画･協力を頂きたいと希望します。

第４章　これからの私たち自身

4.1 社会・地域に必要とされる団体であり続ける

4.1-1　三原JCらしい活動

現在三原市には多くのNPO法人・ボランティア団体等が存在し三原をより良くする為に様々な活動を行っています。このような環境の中、私たち三原JCは私たちだからこそ出来る社会貢献活動を実施してゆかなければなりません。それは前述の各エリアJCとのネットワークを活かした活動や、また私たち独特の規則・気質を大切にして取り組むことです。JC会員は英知と勇気と情熱を持って活動しています。私たち三原JCは例会等の行事への参加率は非常に高く、会の規則を良く守り、会員相互は仲睦まじく活動を行っております。このような私たち三原JCの独特な気質というものを決して失わず、さらに高めてゆくことが、私たちの今後の活動への礎となるはずです。

4.1-2　OB会員とのネットワークをさらに活用

私たち三原JCは約40名前後の会員数ですが、一方で40歳を過ぎて三原JCを卒業された先輩方は2015年１月現在で222名に上ります。現在は現役会員ではありませんが以前は私たちと同様に明るい豊かな社会を目指して汗を流した同じ志を持つ先輩たちです。各エリアJCでもOBの方々が「賛助会員」「サポーター」という仕組みの上で現役と共に活動されておられるという話も聞きます。今後は全てを現役会員で完結するだけでなくそのような先輩方の協力も仰ぎつつ本会の活動を進めてゆきます。

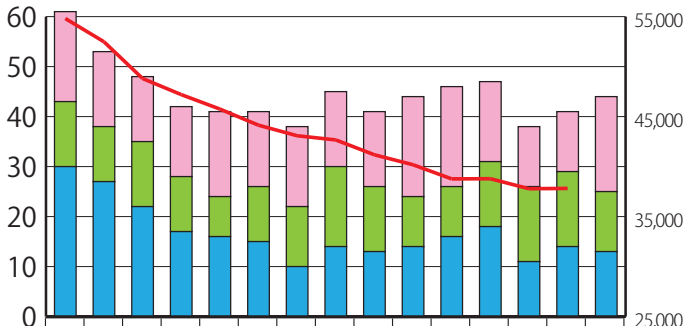
4.1-3　行政・他団体との連携

前述のように現在では地域社会をより良くしたいという団体は私たちだけでなく、行政や各種協会・団体、NPO法人等様々にあります。これからの私たちは全てを単独で解決しようとするのではなく、そういった各種団体との連携を深め協力し合うことで、さらに高い成果を求めてゆきます。

4.1-4　会員の拡大

私たちは明るい豊かな社会の実現の為に志を同じくする仲間をより増やしより活動を活性化させたいと考えています。しかしながら会員数は地域社会の混沌と共にやや減少傾向にあります。また同様に問題なのは会員数だけではなく会員の所属年数も低下の傾向にあり、いわゆるベテラン会員の減少等から組織力としては厳しい状況になりつつあると言えます。しかしその一方でこれまで会員拡大活動も怠らず取り組んできたことによってこれだけの減少数で食い止められているとも言えます。今後も私たちは志を同じくする仲間を増やすことに積極的に取り組んでゆき、2020年までに創立以来の最大会員数である87名を達成することを目標に掲げます。

表 -12　三原青年会議所会員推移（人）



	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
7年以上	30	27	22	17	16	15	10	14	13	14	16	18	11	14	13
4~6年未満	13	11	13	11	8	11	12	16	13	10	10	13	15	15	12
~3年未満	18	15	13	14	17	15	16	15	15	20	20	16	12	12	19

日本JCの会員推移

4.2 次の時代のJAYCEEたちへ

「新日本の再建は私たち青年の仕事である。改めて述べる迄もなく今日の日本の実情は極めて困難に満ちている。この苦難を打開してゆく為に取るべき途は国内経済の充実であり、国際経済との密接なる提携である。その任務の大半を担っている私たち青年は、あらゆる機会を捉えて互いに団結し自らの修養に努めなければならぬと信ずる。」（青年会議所設立趣意書 1949年）

JC最大の魅力は「ひと」との出会いにあります。志を同じくする仲間との出会い。尊敬や憧れの存在との出会い。立場や環境こそ違えど、まちづくりに対する同じ目的を持った方との出会い。またそのような出会いの中でも、明るい豊かな未来に向けて最も大きな可能性を秘めた出会いとは、次世代を担う子どもたちとの出会いであると思います。私たちは様々な出会いの中で日々成長しまちづくり活動に邁進していますが、このまちづくりへの熱い思いを自分たちの世代で完結させることなく、次世代を担う者に受け継いでゆかなくてはなりません。その為に自らを厳しく律し、自己研鑽を怠らず、青年としての英知と勇気と情熱を持って常にまちづくり活動の先頭に立つ。無限の可能性を秘めた子どもたちに模範となる大人の背中を見せることこそが、次世代へまちづくりへの思いを継承してゆく唯一の方法であると思います。そうして脈々と受け継がれたまちづくりへの熱い思いが、私たちJCの基本理念である『明るい豊かなまちづくり』実現に向けての一助となると信じて活動を展開してゆきます。

・「JAYCEE」とは・・・JCに所属するメンバー個人を称する。

4.3 あとがき

まちの未来創造委員会
担当副理事長　大石　努

2005年に策定されたビジョン「三原の誇想 創力」以来9年ぶりとなるビジョン刷新。多くの委員会メンバーが過去のビジョン策定に携わったことがない中で、昨年9月の委員会発足から今後の私たち三原JCのまちづくり活動の方向性を示す新ビジョン策定に向けた活動をスタートしました。

これまで5つのビジョンが策定されていますが、私たちは新ビジョンの方向性を見出す為に過去のビジョン策定に携わられた特別会員の皆様のもとを訪れ、当時のことを教えて頂きました。時代背景や課題、目指していたまちの将来像等をお聞きすること、このまちと当会議所の歴史を深く知ることと共に、単年度人事制であっても明るい豊かな社会の実現に向かってぶれることなく活動を継続してゆく為にはビジョンが必要であることを再認識しました。委員会で協議を重ねた結果、策定内容は現状での課題を洗い出し、それに対する取り組みを掲載することとし、同時にJCはグローバルな団体であることから三原のことだけでなく、国家や世界等社会全体も視野に入れた内容にすることも決定しました。

活動としては幅広い内容に対して当委員会のメンバーが受け持つ項目を決め、各自で内容を調査し、委員会で課題と取り組みを発表することで内容を共有し進めていましたが、その幅広さに委員会だけでは対応しきれず、各委員会や正副理事長、監事等多くの会員にも協力を依頼して策定作業を進めました。

2月例会では過去のビジョンのまとめと新ビジョンの方向性を、6月例会では新ビジョン全体像として課題と取り組みを発表し、その後会員全員を対象とした座談会を2回開催し、そこでのディスカッションから頂いた多くの意見を当委員会で検討、精査した上で最終の仕上げ作業にかかりました。そして試行錯誤しつつ策定内容を詰めてゆき、10月例会では、会員への最終発表を行い、当会議所の新ビジョンとして会員から賛同を得ました。

これからも私たちは明るい豊かな社会の実現を目指して活動を展開して参りますが、その道標としてこのビジョンを活用し、このまちをこの国を次世代により良い形で受け渡してゆきたいと思います。

最後になりますが、この新ビジョンをまとめるにあたり多くの特別会員の皆様、関係各所の皆様等多くの方々にご指導を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。今後とも一般社団法人 三原青年会議所に対しまして益々のご支援、ご鞭撻を賜りますことを心よりお願い申し上げます。

参考文献・引用・参考資料

瀬戸のインターチェンジ“三原”－歴史と未来の調和した福祉都市へ－	1973年(社)三原青年会議所
インターフェイスみはら21C －瀬戸、ロマン、国際色豊かな都市“三原”－	1985年(社)三原青年会議所
New Gravity　みはら －ドラマチックな出会い!広域交流都市－	1992年(社)三原青年会議所
Vision2001 コラボレーションシティ21	2000年(社)三原青年会議所
VISION 三原の誇想(こそう) 創力(そうりょく)	2005年(社)三原青年会議所
三原駅前広場の利用についての提言書	2011年(社)三原青年会議所
三原市長期総合計画 後期基本計画	三原市
地域事例調査	地方自治研究機構
市民意見の募集結果	三原市
三原駅前未利用地の活用について	三原市
三原市の現状と課題	三原市
三原市“新しい総合計画づくり”市民ワークショップニュース	三原市
三原のすがた	三原市
議決結果および賛否の公表	三原市議会
再開発事例集	(社)全国市街地再開発協会 市街地再開発技術研究所
三原市の橋を長持ちさせる計画	三原市土木管理課
地域整備計画実施方針に基づく重点施策	東部建設事務所三原支所
道路事業	中国地方整備局福山河川国道事務所
市町村の中心市街地活性化の取り組みに対する診断・助言事業　報告書	経済産業省中心市街地活性化室
日本における中小都市中心市街地・商店街の衰退と再生について	伊能　久敬
工業統計調査	広島県
商業統計調査	広島県
都市部、地方部における地域コミュニティの衰退	国土交通省
子どもの徳育の充実に向けたあり方について	文部科学省
子どもの徳育に関する懇談会	文部科学省
人口推移及び国勢調査	総務省
日本の将来推計人口	国立社会保障・人口問題研究所
出生中位 死亡中位推計	国立社会保障・人口問題研究所
人口動態統計	厚生労働省

ビジョン策定担当委員会

ビジョン策定メンバー

2014年度(一社)三原青年会議所　組織図

監　事
阪井健太郎
矢崎　昌樹

直前理事長
檜山　泰三

理 事 長
倉橋　英治

特別理事
第39回三原やっさ祭り実行委員長
桐島　勝利

専務理事
新田　圭司

セクレタリー
大原　愛里
田中　亮介
藤井　稔久
由水　忠相

事務局長
蛯原　美子

事務局次長
松村　健悟

事務局員
東　　久枝

副理事長
森川　朋和

総務・やっさ祭り関係委員会
◎西岡　宏晃
○谷水　大輔
桐島　勝利
古本　幸久
三好　慎一
向井　浩一
村上　睦宏
矢崎　昌樹
河本　靖武
野竹　正通

副理事長
大石　　努

まちの未来創造委員会
◎大迫　　亘
○森川　浩一
奥田　　誠
北田　佳嗣
田中　亮介
古林　浩明
村上　睦宏
由水　忠相
田坂　礼人
中野　竜太
山根　　務

副理事長
花田　章浩

組織力向上委員会
◎山手　　誠
○片山　晋一
岩西　孝宗
大原　愛里
阪井健太郎
中野佑一朗
若山　一己
内海　哲平
平田　吉彦

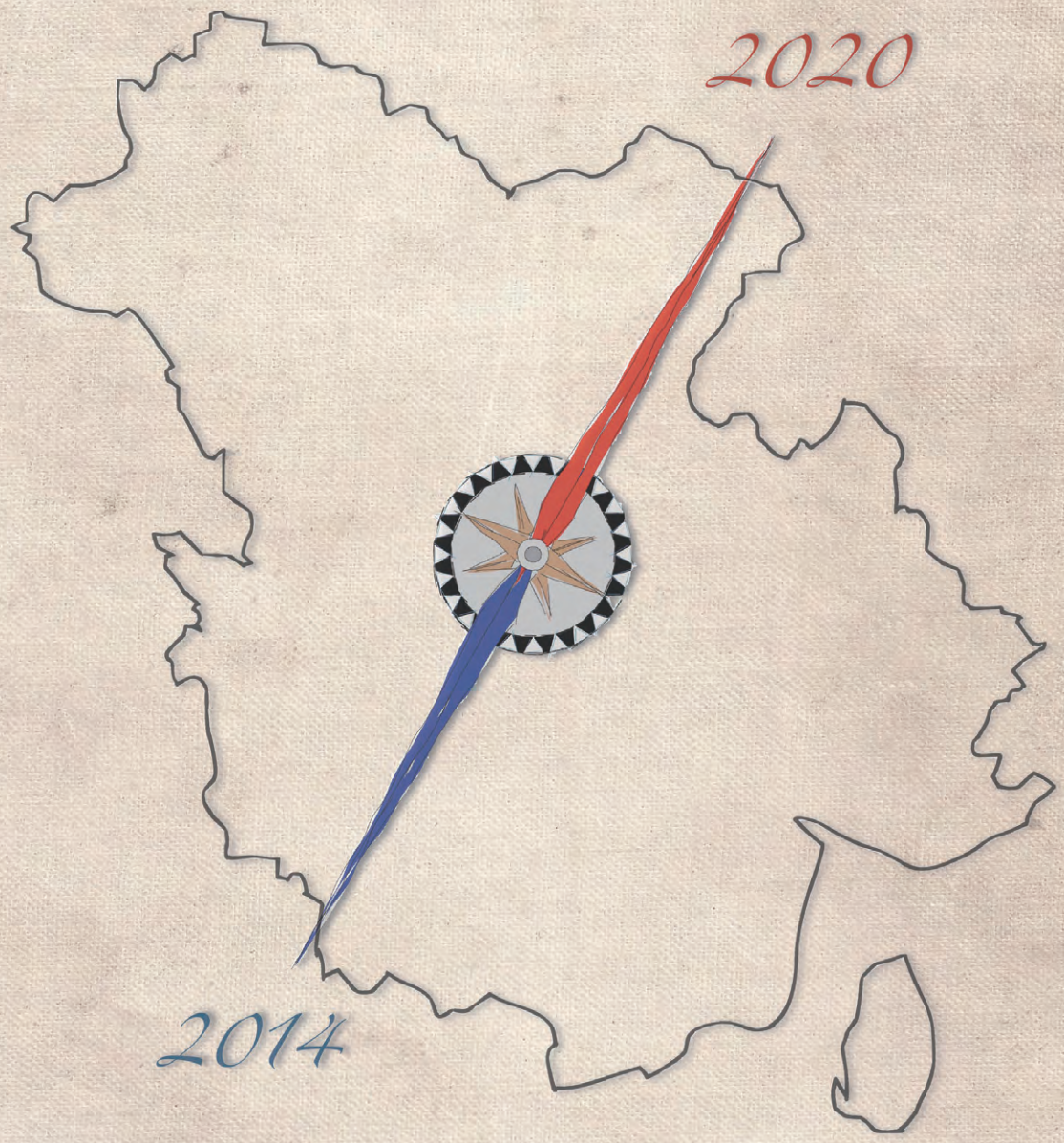
副理事長
冨田　伸博

広報委員会
◎笹井　健司
○松本　浩明
蛯原　美子
浜本　和宏
廣井　友博
藤井　稔久
松村　健悟
矢崎　昌樹
池田　　恵
伊達　正峰

◎　委員長
○　副委員長

監修　村上　睦宏

発　行　(一社)三原青年会議所
発刊日　2014年12月10日


2020
2014